ブロンテ書簡研究（2）

英語教室　岩　上　はる子

(四) 1836年（5月から）

シャーロットは1835年7月から，ロウ・ヘッドにある母校のウラー塾で教壇に立っていた。報酬の一部をエミリの授業料にあてるという契約だったが，エミリは学校になじめず3カ月で帰宅し，10月からはアンが代わりに来ていた。

ロウ・ヘッドではシャーロットは仕事に追われていたが，日曜にはバーストールの教会に礼拝に出かけ，そこでエレンやメアリに会うことができた。彼女たちの住むライディングズやレッド・ハウスの屋敷に招かれることもしばしばあった。エレンの兄ジョージがハダーズフィールドに商用で出かけるときには，途中ロウ・ヘッドに立ち寄って手紙や小包を届けるなどしていた。また父親がソーントンで牧師補をしていた頃からの知人たちも近くに住んでおり，休暇などには姉妹を招待してくれた。外見的にはシャーロットは孤独というより，むしろ多忙であったように見える。

だが教師としての生活は，長い拘束時間と雑用とプライヴァシーの欠如によって，シャーロットに精神的な緊張を強いた。彼女は単調で味気ない教師生活の不満を「ロウ・ヘッド日記」と呼ばれる断章に書きつけている。現在6編の存在が確認されている。その最初のものと思われる1836年2月4日付けの'Well, here I am at Roe Head'で始まる断片には，夜7時をまわってようやく自分の時間をもて，「この世の惨めな果てしない洪水のうえに浮かんでいるわたしだけの箱船に帰り着く」という表現がある。教師の仕事や環境になじめないことを認めたあと，シャーロットは続いて「わたしは自分の義務はきちんと果たしている。言ってみれば――たとえが不敬にならなければ――神が火のなかにも風のなかにもおわさぬように，このわたしの心も仕事や課題や運動のなかにはないのだ」と言いきる。教師としての毎日の生活を〈試練〉と捉え，自分の心のよりどころを散文的な日常世界にではなく，心のなかの夢想の世界に求めるという二重の生活をシャーロットは生きるようになった。

仕事のあいまを縫うようにしてエレン・ナッシに書き送った手紙には，シャーロットが感じている罪悪感や自己嫌悪が滲みでている。だが彼女はその悩みの原因については語っていない。現在ではこの時期にシャーロットが記していた日記の存在が明らかになり，また1829年から書き続けてきた初期作品の解明が進むにつれ，この時期のシャーロットの精神的な葛藤の背景が明確になりつつある。シャーロットがみずから「地獄の世界」('All this day I have been in a dream'ではじまる日記, 8-10.1836)と呼んだアングリアの物語世界に逃避し，しだいにその官能な世界に陶酔していくこ

とに罪悪感をつのらせていった過程が見えるのである。

28（43）　〔ロウ・ヘッド　1836年3月？〕

愛するエレン――朝食の席でお手紙をわたされ，急いで返事を書いています。試練が続いているようですね。きっと神さまがそれを取りのぞいて下さるか，それに耐えられる力をお与え下さるものと信じています。お会いして少しでもお力になれたらと思うのに，それもままなりません。Wのこと，なんとお慰めしたらよいのかわかりません[1]。嫌味になってはいけませんので。病人を抱えた家族の気持ちは，他人にはわからないものですから。今さら言うまでもないと思いますし，もうきっとくり返し唱えておられることでしょう。「神の成し給うことは，なべて成就するもの」[2]と申します。たとえ最悪の事態になっても，またついに死が希望をうち砕くかに見えたとしても，エレン，どうか忘れないでほしいのです。すべてはキリスト教徒としてのあなたの堅い信念と慎しい献身に対する試練であるということを。けれども未だその時ではなく，お兄さまがすっかりご快癒なさるよう切に願っています。自分の身体のことなど構わないなんて，悲しいです。あなたのそばにいられたら，せめて同情することで，降りかかる重荷をいくらかでも軽くしてさしあげられるのに。こうした混乱と苦難のなかで，わたしのことを忘れずに思い出してくださって，心から嬉しく思います。苦しい時はえてして自己本位になりがちなものです。わたしの知るかぎり，あなたにそれはあてはまりません。いつになったら会えるのかしら。はっきりした答えを出せないので，わたしの心は沈みます。何がおころうと，どんな成行きになろうと，あなたへの気持ちは変わりません。わたしたちはたがいのために祈り，たがいの身を案じることができます。たとえ身は離れていても，たがいを思う気持ちを封じることはできません。すぐにお便りをくださるとのお約束，きっと守ってくださるわね。M[3]とお母さまによろしく。愛と祝福を。心からお幸せを祈っています。W先生もよろしくとのことです。

C・ブロンテ

1）エレンの5番目の兄William Nussey(1807-1838)は，長兄John(1793-1862)と同じように医学を修めクリーヴランド・ロウ（ロンドン）の兄と同居していたが，1836年2月頃から鬱病になり実家に戻っていた。1838年6月に死亡。兄によってその死因は隠されていたが，真相はテムズ川への投身自殺であった。

2）出典不明

3）エレンの2番目の姉Mary(1801-1886)のこと。少女の頃モラヴィア派（聖書を唯一の規範とするキリスト教の一派）に傾倒し，マンチェスター近在のフェアフィールドにあるSingle Sisters Houseに入り，Mercyという名前をもらった。そのためMercy MaryあるいはMary Mercy，またはたんにMecyと呼ばれることもある。

29（44）

最愛のエレン――こうしている今も，心は少しも落ち着きません。あなたがもしわたしのことを考えているなら，この瞬間にもわたしを恩知らずな薄情者と思っているだろうとわかるからです。いつも変わらないあなたの優しいお心遣いを，わたしが感謝していないだなんて。先日の思いやりあふれるお手紙，とても嬉しかったです。「ではなぜ返事をくれないのか」とおっしゃるでしょう。ウラー先生のお返事を待っていたのです。学校が始まらないうちに，あなたをハワースにお招きする時間があるかどうか，先生に問い合わせたというわけです。返事が来るなり呼び戻されてしまい，お知らせする時間さえありませんでした。許していただけるかしら？きっと許してくださるわね。あなたは長くは怒っていられない方ですもの。試してごらんになる？わたしの身体のことをご心配

いただいたようですが，おかげでもうすっかり良くなりました。それほど悪かったわけではないのです。傘に添えられていたお便り，胸に染みました。わたしの悩みに対して，どなたからも期待できないほどのお心づかいをいただきました。わたしは正しき者を装うことはできません。あなたの優しいご質問にも，お望みのような答えをするわけにはいかないのです。どうかわたしにも善いところがあるかもしれないなんて，ご自分を欺いたりしないでください。もしわたしがあなたなら，シオン[1]を目指していたかもしれません。でも輝かしい神殿も偏見や誤解のために，霧にかすんでときおり見失ったでしょうけれど。あなたの一途さも，ときには問題です。けれどわたしはあなたではありません。もしわたしが胸の内に秘めていることを，わたしがのめりこんでいる夢想のことを，ときおりわたしを陶酔させ，日々の生活を惨めなほど退屈に感じさせる恐ろしい夢想の世界のことを知ったら，あなたはわたしを憐れみ，そして軽蔑なさることでしょう[2]。けれどエレン，わたしは聖書の宝を知っています。命の泉がはっきりとこの目に見えるのです。ところが澄みきったその水を飲もうと身をかがめると，水は唇から退いていってしまうのです。まるでタンタロスです。馬鹿なことを書いてしまいました。お姉さまによろしく。さようなら。　　シャーロット

ロウ・ヘッド ———1836年5月10日

早く来て欲しいです。どうか，頭がおかしくなったなんて思わないでね。馬鹿げたお便りになってしまいました。

1）エルサレムの古い別称。後に祖国を追われたユダヤ人たちにとって，シオンはパレスティナへの帰還と民族国家再興の夢と希望とを指す言葉となり，19世紀末のシオニズム運動を生んだ。

2）シャーロットはロウ・ヘッドにいる間もアングリアの構想を練っていた。'Well, here I am at Roe Head'で始まる日記(1836年2月4日付け)には，アシャンティー族長クォーシャがザモーナ王妃メアリの寝室を汚す官能的な場面を描いている。

30 (45)　　ロウ・ヘッド (1836年)

愛するエレン———お手紙を読んで，興奮のあまり震えがとまりません。こんなお便りをいただいたのは初めてです。そこには優しく濃やかな思いがあふれていました。人間の思惑に左右されることなく，神ご自身のお導きになる真情が伝わってきました。わたしはとてもそんな貴い慈愛を受けるには値いしない人間です。エレン，あなたは信仰によってご自分を磨きあげられました。ご親切に心から感謝いたします。もうおたずねに怯んだりはしないつもりです。わたしは今ある自分よりましな人間でありたいと切望し，時にそうなれるよう熱心に祈ります。すると胸が痛み———悔恨にかられ———かつて知らない聖なる姿がかいま見えるのです。やがてすべてがかき消え，暗黒の闇のなかにとり残されます。これが真に福音のもたらされる夜明けであるなら，真昼にいたるまで照らし給えと慈悲深い神に祈ります。エレン，どうか誤解しないで下さい。わたしのことを善い人なんて思ってはいけません。そうありたいと願っているだけですし，今までの自分の軽薄さと傲慢さを恥じるばかりなのですから。ああ，何ということでしょう。わたしは少しも善い人間になどなっていません。恐ろしい不安の影におびえています。たとえこの瞬間に年老いて白髪にかわり，楽しみ多い青春の日々を奪われ，墓地の縁を歩むことになっても厭いません。もしそれで神のひとり子の恩寵によって神に許され，救いへの道が開かれるものならば。これまでも関心がなかったわけではありません。けれどいつも漠然とした反発を感じながら過ごしていました。そして今，あろうことか，雲が低く厚く垂れこめて心を重くするのです。エレン，あなたの励ましに，一瞬，ほんの

一瞬ですが，あなたをお姉さまと呼びたい気持ちにかられました。けれど興奮もさめ，ふたたび希望を失って惨めな気持ちに閉ざされています。今夜こそ言われたように，お祈りをするつもりです。どうか全能の神が憐れみ深くお聞き届け下さいますように！謙虚な気持ちで神のお慈悲を信じます———わたしの汚れた願いが，あなたの汚れないお祈りによって清められるのですから。まわりは大変な騒ぎです。生徒さんたちが算数の問題や課題をもって詰めかけています。ウラー先生はラウズ・ミル[1]においでです。今週は毎日のように，エレンは来ないのかしらと言っておられました。私のことを思ってくれるなら，どうかお願いです，金曜日においでください。お来しになるのを，じっと待っています。来ないとわかったら，泣きだしてしまうでしょう。食堂の窓辺にたたずんでいたら，ジョージお兄さまがさっと近づいて来て，塀越しにあなたからのかわいい小包を投げてくれました。どんなに歓びにふるえたか，わかってもらえるかしら。もうこれいじょう書き続ける勇気はありません。仕事をなおざりにしているのですから。お母さま，お姉さまによろしくお伝えください。もう一度あなたのご親切に心から感謝申し上げます。さようなら，清らかなるエレンへ。

1）Rouse Mill　ミス・ウラーの両親が住んでいた。父親が1836年頃から病気がちで，その世話のために出かけることが多かった。

31（46）　　ロウ・ヘッド（1836年）

有望な生徒たちが稀にみる愚かさを露呈した一日の苦役に疲れはて，わたしはいま愛するエレンにあて，慌ただしく数行を書き送ろうと机に向かっています。つまらないことばかり書いても許してください。心が重く暗く沈んでいるのですから。嵐のような夕暮れで，風は止み間なくうなり声をあげ，ひどく滅入らせます。エレン，こんな気分の時は，静かにもの思いに耽けって心を落ち着けるようにしています。気持ちが安らぐには，あなたの面影を思い浮かべるのです。黒いドレスに身を包み雪白のスカーフをまとったあなたが居ずまいをただし，純白の大理石の彫刻のような顔に優しい穏やかな微笑を浮かべています———まるでうつし身かと思うほどに。話しかけて下さったら。わたしたちはたがいにひき離され———遠く別れわかれに暮らし，この先ふたたび会えない運命ならば———年老いてから若き日々をふり返って，旧友エレン・ナッシを思い出しながら悲しくも心たのしい時間をもつことでしょう。わたしは人を好きになると，そのことを告げないではいられない性分です。あなたの虚栄心をくすぐることになるとは思いません。あなたの魅力は信仰に由来するものです。あなたがいつの日までも変わることなく清らかで慎み深く，心優しく慈悲を施されますように。そんなあなたに比べて，このわたしはいったい何なのでしょうか。あなたのことを思うたびに，わたしは自分の無価値なことを思い知らされます。エレン，わたしは下品で凡庸で惨めたらしい人間にすぎません。わたしには自分を恥ずかしく思わせるだけの特性があるのです。それはあなたの預かり知らない感情ですし，それが解る人はほとんどいないでしょう。自分が変わっていることを自慢したいのではありません。できるだけ抑えようとするのですが，ときにほとばしり出て，それを目にした人たちはわたしを蔑すみ，それから幾日もわたしは自己嫌悪にかられるのです。これからお祈りの時間です。ですからもうくだらないことを書いている暇はありません。でもこれが本当のところなのです。もっとましな手紙が書けない以上，これをお出しするしかありません。何を書いたらよいのかわかりません。お手紙と贈り物，いただきました。なぜお姉さまたちがわたしなどにご親切にしてくださるのかわかりません。感謝しているとお伝えください。エレン，お便りと贈り物をほんとうにありがとう。お便りは嬉しく，贈り物はなにかしらもの悲しかったわ。お

姉さま方によろしく。ありがとう。いただいた帽子はわたしには可愛いすぎるようです。もうこれ以上，書き続ける勇気はありません。次にお会いできるのはいつの日のことでしょうか。

32 (47)　ロウ・ヘッド（1836年5月28日）

愛するエレン———ご親切なお招き，でもこうしょっちゅうでは困ってしまいます。なんといってお断りしたものやら，といってお受けしたのではかえって面倒なことになってしまうでしょう。とにかく今週は行けません。こちらは暗唱の真っ最中で，お手紙が届いたときにも，すさまじいばかりの第5節を聞かされていたところです。なのにウラー先生は，金曜日にゴマソール[1]を訪問するようにおっしゃるのです。わたしのために聖霊降臨際[2]にお約束したからと。都合がつけば日曜の朝に教会でお会いして，月曜の朝までライディングズ[3]に滞在できるでしょう。この提案はお金もかからないし，簡単でしょ。ウラー先生の強いお勧めによるものです。先生はほっとけない性格だからとおっしゃって！お母さまの具合がよくなかったとのこと，心配です。でももう良くおなりでしょう。またお家の皆さまもお元気のことと思います。日曜に教会でミス・テイラーに会ったら，同封してある手紙を渡していただけないかしら。エレン，およそ人間の手になる最悪の文字を，どうか許してね。お母さま，お姉さまたちによろしく。友より。

シャーロット

1）原注：メアリとマーサ・テイラー姉妹はゴマソールのThe Red Houseに住んでいた。
2）Whit-Sunday　精霊降臨際（キリストの復活後50日目に精霊が使徒の上に降臨したのを記念する日。復活祭後の第7日曜日。）
3）エレン・ナッシの家族は，エレンが9歳の時に父親が死亡していらい，父の弟Richard Nusseyがバーストールに所有するRydingsの屋敷で10年間いっしょに住んでいた。叔父の死後，一家は1836年9月にブルックロイドに転居する。

33 (48)　［ロウ・ヘッド，1836］

エレン，あなたへのお便りはどれもみな走り書きです。今も機会をとらえて———J・ウラーさんがこちらにお見えなのをよいことに，彼からミス・E・Wに，そこからヘンリへ，そしてあなたに渡していただこうという寸法です。おいでくださらないのを責めたりはしません。きっとやむを得ない事情があってのことでしょう。でも会いたくてたまりません。ほんの一時でも，なんとか早く願いがかなわないものかしら。何事もなければ来週の金曜にゴマソールに出かけます。日曜日にはちらりとですが，お会いできるかと思います。毎週あなたの来ることだけを楽しみにし，毎週，その希望を打ちくだかれました。先日のお便りに書いたこと，悔やんではいません。お礼の言いようもないほどの思いやりに心うたれ，告白せずにはいられなかったのです。不思議な精神状態のなかにあってまだ気分は沈んでいますが，絶望してはいません。善を行ない悪しき心をおさえ，誤った考えを捨てようと努力しています。それなのに———なお———正しい道から反れそうになる自分にたえず気づかされます。ややもすれば自分よりずっと立派な人たちを軽蔑しそうになります。自分もある種の人たちの仲間入りになってしまうのでは，口をすべらせればたちまちパリサイ人に成りさがって独善家の列に加えられてしまうのでは，そんな恐れが頭を離れません。こうしてお便りしている今も，口先だけでお祈りの文句を唱えることに，どうしようもなく反発を覚えます。わたしは自分を恐れ憎みます。もしもカルヴィン派の教義が正しければ，わたしはすでにして神に見放されたものなのです[1]。わたしがどんなに反抗的で，どんなに救いがたい感情を抱いているか，あな

たには想像もできないでしょう。この問題について考えはじめると，ほとんど冒瀆的になり無神論的な気分にすらなります。どうかわたしを見捨てないで，わたしのことを恐がらないでください。わたしがどのような人間かはおわかりでしょう———愛しいあなたにお会いしたいです。熱く消えることのない愛を惜しみなくあなたに捧げてきました———冷淡にされたなら———もうおしまいです。お母さま，お姉さまたちによろしく。

1）あらかじめ予定された者だけが地獄の火を逃れることができ，他の者たちはいかに努力しても天国に行くことはできないというカルヴィン派の運命予定説に，シャーロットもアンも強い影響を受け，自分たちは救われないのではという宗教的憂鬱に陥った。

34（49）　フランクス夫人，ハダーズフィールド[1)]

拝復———ご親切なお招きに，お返事を申し上げるのが遅くなってしまいました。いつお受けできるか決ってからと思いましたので。今朝ようやくウラー先生が終業日を決められました。休暇は今月17日の金曜日からということです。当日，何事もなければアン[2)]とふたりで，喜んでハダーズフィールドにお伺いしたいと存じます。お加減がいくらか良くなられたと聞いて，ふたりともとても喜んでいます。このところの好天気で，すっかり落ち着かれるとよろしいのですが。最後におじゃまして以来，お宅でも変化があったことでしょう。ジョンも今ではさぞ立派な男の子になっているでしょう。また可愛いヘンリとエリザベスもだいぶしっかりしてきたことでしょう。ミス・ウースウェイト[3)]のお怪我のことを聞いて，とても驚きました。でも丈夫な方ですから，すぐに治癒されると思います。その回復ぶりをぜひ聞かせていただきたいです。金曜日の午後4時か5時の馬車で参り，月曜の早朝の馬車で発ちたいと考えています。一日も早く帰宅するよう父が望むと思いますので。だいじなお友だちをお訪ねしていることは承知しているはずなのですが。急ぎ認めましたので，何か誤りがあったらお許しください。お優しいお便りに返事が遅れましたこと，どうかわたしの落度とお思いにならないでくださいませ。仕方がなかったのです。ふたりから愛をこめて。

C・ブロンテ

ロウ・ヘッド，36年6月2日

1）Mrs Franks（旧姓Elizabeth Firth, 1797-1837）　ソーントン時代（1815-1820）からのブロンテ家の友人。ブランウェルの名づけ親で，彼がロンドンの王立美術院へ入学する計画が立てられたとき，必要な資金を提供した。またシャーロットがロウ・ヘッドに入学した際にも財政的援助を申し出た。「ブロンテ書簡研究（1）」（鳥取大学教養部紀要第27巻，平成5年11月）p. 230 注3参照。

2）原注：アンは1836年1月（1835年10月が正しい）から，エミリに代わってロウ・ヘッドで学んでいた。

3）Miss Outhwaite, Fannie (Frances) ソーントン時代からの友人。アンの名づけ親。同上，p. 230　注4参照。

35（50）　フランクス夫人，ハダーズフィールド

ブラッドフォード近在ハワース

ヨークシャー，1836年6月3日[1)]

拝啓———ご親切にもシャーロットとアンを一週間ほどご招待いただいた由，娘から聞きました。ところが何とも気の早いことに，せっかくのお招きを数日にしたいと申し上げたようです。娘たちには考え直すように，手紙で言ってやりました。光栄にも娘たちがしばらくお宅でお世話になれるなら，必ずやふたりにとって有益なことを見聞できるものと思います。あなたのことは昔から存じ

上げていますし，ご主人の人となりについても確かな筋からよく伺っております。そのうえで決めたことです。この旨，シャーロットとアンには書き送りましたが，なにぶんにも（人づてのため）間に合わないかもしれません。娘たちにはあなたからお伝え願えればありがたいのですが。お宅へ伺うにはギグをまわします。場合によってはそのままロウ・ヘッドに帰っても，私どもは構いません。ミス・ブランウェルもおなじ気持ちです。彼女からも，おふたりにくれぐれもよろしくとのことです。もしお会いになるようなことがあれば，アトキンスンご夫妻にもよろしくお伝えください。ブラッドフォードの知人たちとはだいぶ御無沙汰です。しかし懐かしいミス・ウースウェイトが腕を骨折したと聞いて，先日お見舞いにでかけました。多くの人達に会って，「懐かしい昔」の思い出の数々が鮮やかに蘇りました。

何人かの，いえおそらく誰のうえにも，時は変化をもたらしていました。それでもすぐにわからなかったのは，わずか一人だけでした。皆さん総じて気を遣ってくださり，若返ったなどと言われました。それも心優しいひいき目というものでしょうが。

ご健康とご多幸を心より祈っています———いつまでも変わらぬ心で，友より。

P・ブロンテ

1）父ブロンテ師の手紙。彼は妻の死後まもなく，当時はまだ独身であったエリザベスに再婚を申しこんだ。彼女はブロンテ師より20歳ほど年下であり，また一人娘でソーントンの名家キッピング・ハウスに住み，経済的にも恵まれていた。彼女は彼の求婚を断ったが，それから3年ほど後にハダーズフィールドのJames Franks牧師と結婚した。その後もブロンテ家とは付き合いがあった。

36 (51)　〔ハワース，1836年7月〕

親愛なるエレン———この2週間，毎日あなたのお便りを待ち詫びました。けれど一向に連絡がないので不安になってきたところです。いつになったら来ていただけるのかしら。まだ3週間ほど残っているので，ぎりぎりまで先送りするお考えのようですね。どうか自分がいなければ家ではどうにもならないなんて思いませんように。あなたがいなくても，少しのあいだくらい何とかなるわよ。それよりエレン，ほんとうにもう怒ってなどいないでしょうね。すぐに手紙をください。そしてわたしの不安を取りのぞいてください。そうでなければ，じりじりとたまらない気分です。

ハダーズフィールドでだれに会ったかわかるかしら。なんとアミーリア・ウォーカー[1)]なのよ。金曜に牧師館に着いてみると，そこに彼女とお姉さん，弟さん，それにご両親がおそろいだったのです。皆さんやけに丁重で，アミーリアときたら大げさに友情を示しました！以前より背が伸びてすらりとして，色白で優雅になったようでした———相変わらずとてもきれいで淑女らしくて，垢抜けた感じでしたが，あんまり気どっているものですから台なしです。お姉さんを見習ったらいいと思うわ———ほんとうにお手本にしたいような人で，物腰といい性格といい気どらず好感がもて，とりたてて美形でなくても人を惹きつけます。火曜日はラッセルズ・ホール[2)]で過ごし，とても楽しい一日でした。アミーリアはころころと気分が変わり，甘ったるい感傷にふけっていたかと思うと，傍若無人におしゃべりするといったぐあいでした。時には「わたくしって済ましていた方が，きれいに見えるかしら」といったかと思うと，今度は「親しみやすい方が，わたくしには似合うかしら」なんてきくのです。また昔の級友のことをたずねている振りをしてたのが，つぎには社交界の人たちの逸話をこと細かに話しはじめるのです。とうとうわたしはうんざりして，弟ならましかと思って話しかけてみました。ところがウィリアム・ウォーカーは図体だけは一人前だけれど———大男，

総身に知恵が回りかね，というわけで，その口からはまともな言葉ひとつ聞かれませんでした。お父さま，伯母さま，みんなからよろしくとのことです。お母さまとお姉さまにくれぐれもよろしく。お母さまはすっかり良くなられたことと思います。すぐにお便り下さい，そして日程を決めて欲しいです。

かしこ

シャーロット

1）Amelia Walker　シャーロットの名づけ親アトキンソン夫人の姪。ロウ・ヘッドでシャーロットと同級生だった。「書簡研究（1）」p. 244注36参照。なおアミーリアは未完に終わった最後の初期作品'Ashworth'(1839年末から1840年初めにかけて執筆)に，Amelia De Capellとして登場している。

2）原注：アトキンソン師はブロンテ師のソーントンの前任者で，またハーツヘッドの後任者でもあった。ハダーズフィールドの名家ラッセルズ・ホールのFrances Walkerと結婚した。

37（52）　　（ロウ ヘッド，1836年）

先週土曜日の午後，感傷的な気分で手紙を書きました。その内容はわたしとおなじように頭のおかしいM・テイラーにこそふさわしいもので，今日それを読み返してみて，冷静なあなたが読めばきっと呆れてしまうに違いないと思い，あらためて書き直すことにした次第です。エレン，あなたについて思うところ感じるところを何もかもお話するつもりはありません。口をつぐんでいればこそ，どうにかこれまで通り分別ある者と思っていただけるでしょうから。そうでなかったら，とうの昔にフランスかぶれの狂人[1]と言われていたことでしょう。あなたの優しい心遣いのおかげで，人に笑われずにすみました。これまでは惨めな傷つきやすい性格から，人の嘲笑を灼きごてを当てられたかのように感じたものでした。だれも気にもとめないようなことでも，わたしの心には毒液のように染みこむのです。こんな風に感じるなんてばかげていると思い，さりげなくふるまおうとするといっそう深く刺されるのです。なんて馬鹿なのでしょう！

先週の日曜日，ジョージお兄さまがマーフィールド教会にいらしたと聞きました。もちろんお会いできませんでしたが，咳ぶく声で（近眼のせいか耳は聡いのです）わかりました。ミス・ワイツ〔？〕が，お兄さまがいらしていると言うと，みんなすっかり夢中になって，その晩はお兄さまの話でもちきりでした。ミス・エライザ[2]はお兄さまの服装を，さらには連れの方のようすまでも呆れるほど事細かに話してくれました。まるで絵に描いたみたいで，おなかを抱えて笑いました。あなたも聞いていたらきっと我慢できなかったでしょう。

エレン，いつもあなたと一緒にいられたなら，これまで以上にあなたに夢中になってしまいそうです。自分たちのごく小さな家とささやかな資産があれば，あれこれ気兼ねすることなく死を迎えるまで，愛しあって幸せに暮らしていけるでしょうに。わたしの愛しいエレンへ

（ロウ・ヘッド9月26日，1836年）

1）初期作品'Albion and Marina'（10.1830）において，主人公マリーナ（ことメアリアン・ヒューム）対抗するゼルジア（ことゼノビア・エルリントン）のことをFrenchified rivalと呼んでいる。

2）Miss Eliza　ミス・ウラーの末の妹。姉の学校を手伝っていた。

38（53）　ブルックロイド[1]

肝心のバッグをお送りするのを忘れるなんて――――目につくようにと丸一週間も化粧室に下げておいたのに――――いよいよ頭がおかしくなった思われるでしょうね。使いの子を出す前に，立ったま

ま10分も考えていたのに。本のほかにも何か持たせるものがあったような気はしていたのです。こうした記憶力の低下に，もはや若くはないことを思い知らされます。

こちらの怠慢であなたに不都合がなければよいのですが。明日ジョージお兄さまがハダーズフィールドにいらっしゃる途中で，立ち寄られるかどうか待ってみます。もし来られなければ，人を雇ってブルックロイドまで届けさせるつもりです。不注意と思われるのではないか，とても悲しいです。でもこれは一時的な物忘れの発作のようなもので，どうしようもなかったのです。クリスマス以前に何とか会いたいですが，それは難しいでしょう。でも3週間もしないうちに，静かな懐かしの我家にわたしの精霊をお招きできるものと思います。いつもあなたといっしょで，毎日ふたりで聖書を読み，慈悲の泉から澄み切った水をともに口にできたなら，いつの日かわたしはより善き人間になれるかもしれません。邪悪な思いと堕落した心を宿し，精神的なものを顧みず肉体に対して熱い思いを抱いている今のわたしよりも遙かに善い人間に。ふたりが送るであろう幸福な生活をときおり思い描いています。かつて聖人たちが究めたといわれる崇高で光輝く献身，あの自己否定に到達できるよう互いに励ましあうのです。そうした未来への希望に彩られた至福の状態と，現在の自分のおかれている陰鬱なありさまとを比べて，わたしの目は涙に濡れます。はたして真の悔い改めをしているか不安です。身も心もあてどなくさまよい，わたしにはとうてい到達しえない清浄な世界にひたすら憧れるばかりです。時に＊＊＊の言うおぞましいカルヴィン派の教えは真実なのではと恐怖にとらわれ，精神的死の影に暗く閉ざされます。救われるためには全きキリスト教徒でなければならないのなら，わたしなどけっして救われることはないでしょう。わたしの心は邪悪な思いを生みだす熱き温床であり，実践については，いざ行動をと思うときには救い主のお導きを仰ぐことを忘れてしまうのです。

どのように祈ったら良いのかわかりません。善を成すという立派な目的と，自分の人生とを結びつけることができないのです。たえず快楽を求め，欲望を満たしてくれるものを追い続けています。神を忘れてしまうわたしのことなど，神がはたしてお忘れにならないものでしょうか。そうした一方で私はエホバの偉大なることを知っており，彼の真実なること，彼の言葉の正しきことを信じて疑いません。純粋なキリスト教を信仰しているのです。わたしは理論において正しく，行ないにおいてひどく足を踏み外しているのです。

———さようなら，エレン

できるならまたお返事をだきたいです。あなたのお便りはわたしには何よりの楽しみです。皆さまによろしくお伝えください。マーシーの具合がよくなるよう祈っています。

月曜日・朝　ロウ・ヘッド（1836年12月6日）

一晩でもブルックロイドに伺えたらと思いますが，ウラー先生にお願いするのははばかられます。先生は今デューズベリー・ムーアにお出かけで，火曜の夜11時になろうとする今，わたしは一人ぼっちです。あなたがここにいてくれたら。皆が床についている中で，わたしひとりが寝もやらで最愛のあなたのことを思っております。

バッグが届いたか否か確認したいので，ほんの走り書きでけっこうですから，使いの者にお渡しください。今日の午後，通りでジョージお兄さまを見かけました。通り過ぎてからアンにいわれて気がつきました。挨拶もせず，さぞかし気のきかない女と思われたことでしょう。是非もありません。

1）エレン一家は叔父Richard Nusseyとライディングズに10年近く住んでいたが彼が死亡し，その遺言によって屋

敷は売りに出された。エレンの長兄ジョンが買い取ったが，そこには義母Mary Walkerの家族が住むことになり，エレンたちは1836年9月から故リチャード叔父の所有であったブルックロイドに転居していた。

39（54）　　〔ロウ・ヘッド，1836年12月14日？〕

親愛なるエレン――優しいお便りにたいしてひどくお粗末な返事しか書けませんが，許していただけるものと思います。手紙が届いた時にも，そしてこうして走り書きしているあいだも，家中で帰り支度に大騒ぎしているからです。今日みないっせいに家に帰るのです。

わたしの欠点を優しくかばってくださいましたが，それを真実と思うわけにはいきません。あなたのように寛大に見てくれる人はそう多くはないのですから。いたわりをこめた思いやりあふれるご忠告をひとり静かに読むとき，きっと心慰められるものと思います。けれど今のように気ぜわしく落ち着かない状態では，そこに書かれた清らかな聖書の精神に入っていくことができません。他のことに注意を奪われ集中できないので，この話題を続けるのは適切でないように思います。ハワース訪問について，なにも触れていませんね。お家の方々にご相談なさったかしら。お許しを得られましたか――帰りしだいまたお便りします。先週の金曜からずっと，半期の授業の仕上げで猛烈な忙しさでした。地理の問題で悪戦苦闘し（ミス・Mやミス・Lに説明するのを想像してみてちょうだい），はてはミス・E・Lの洋服の繕いでようやく終ったという次第です[1]。可愛いそうに＊＊＊がまた具合が良くないと聞いて，とても悲しいです。よろしく伝えてください。ウラー先生がお呼びです――わたしの生徒のナイト・キャップがどうかしたらしいです。それではじきに会いましょう。

C・ブロンテ

1）「ロウ・ヘッド日記」'All this day I have been in a dream'(14.10.1836)で始まる断章には，Miss Lister, Miss Marriot, Ellen Cookの名前が見られる。

40（55）　　1836年12月29日

親愛なるエレン――約束の手紙をもっと早く出さないで，さぞ怠け者と思っているでしょうね。でも悲しいきちんとした訳があるのです。家に帰って数日後のことですが，タビー[1]が怪我をしてしまったのです。村に用事があって急坂を下りて行ったところ，道が凍っていて足を滑らしたのです。暗かったこともあって見ていた人もなく，ようやく通りかかった人がうめき声に気づいてくれたのです。近くの薬局にかつぎ込まれ診てもらったところ，脚が完全に脱臼し折れていることがわかりました。運の悪いことに医者がつかまらなくて，手当てが済んだのはもう翌朝の6時になっていました。今は家で寝ていますが，予断を許さない状態です。みんな事の次第にひどく胸を痛めています。というのもタビーは家族の一員のようなものですから。事故いらい手がなくて――時どき立ち寄って片づけをしてくれる人はいますが，まだきちんとしたお手伝いは雇っていません。ですからタビーの看病に加えて，家事一切がわたしたちの肩にかかってくるというわけなのです。こんな状況ではとてもお招きするわけにはいきません。少なくともタビーの容態が落ち着くまでは。あまりに身勝手というものでしょう。伯母さまはもっと早くお知らせしてはという意見でしたが，お父さまや他の者たちはもう少し目鼻がつくまで待って欲しいといったのです。わたし自身は一日延ばしにしていたというわけです。こんなに長いあいだ楽しみにしていたことなので，なかなかあきらめがつかなかったものですから。でもあなたが言っていたことを思いだしました。すなわち自分より高いものに決定をゆだね，それがいかなるものであれ甘んじて受けるということばです[2]。わたし

も黙って従うのが自分の義務だと考えます。それが最善の道なのかもしれません。この厳しい天候のなかをいらしても，なにもよいことはないでしょう。荒野は雪で閉ざされているので，外出もままならなかったでしょう。こんなに落胆した後なので，つぎに楽しみを繋ぐ気にもなれません。わたしたちのあいだには運命のようなものが立ちふさがっているような気がします。わたしはあなたには値しません。だからあなたは，あまりわたしと親しくなって汚れてはならないのです。それでもわたしは来て欲しいと思い———せがみ，ねだることでしょう———けれど胸をよぎるのは，あなたの滞在中にタビーの身にもしものことがあったら，わたしは決して自分を許すことができないだろうという思いです。そんな事は断じてあってはなりません。それを思うとわたしは心乱れ挫けてしまうのです。がっかりしているのはわたしだけではありません。家中であなたの来るのをほんとうに心待ちにしていたのです。お父さまはあなたとのおつき合いをとてもよいことだといい，これからもずっと続けるよう望んでいます。お姉さんは良くなられたことでしょう。また皆さまもお変わりありませんように。お兄さまお姉さまによろしく。心沈む友より。

かしこ

C・ブロンテ

すぐにお便りをくれないと，むしゃくしゃした今の気分では捨てられたものと思うでしょう。

1）Tabitha Aykroid(1770-1855)　1824年から死亡する1855年までブロンテ家の召使いとして仕えた。骨折したとき父と伯母はタビーを村にいる妹にひきとらせることを主張したが，エミリーが中心となって3人でハンガー・ストライキをしてタビーを牧師館で世話することが許された。

2）モラヴィア派にはDecision by Lotという，くじ引きによって運命を決めるという習慣がある。もとはボヘミアに生まれた聖書にのみ基づく信仰と実践を強調するモラヴィア派は，18世紀半ばにはイギリス北部を中心に広まった。1755年いらいゴマソールにも教会ができ，ナッシ家やテイラー家はその信者であった。エレンと姉たちやテイラー姉妹もロウ・ヘッドに入る前に，教団の運営するLadies' Academyで学んでいた。

（五）1837年から1838年まで

1836年末から37年初頭のクリスマス休暇の間に，シャーロットとブランウェルは将来の職業として作家になることを考え，具体的な行動にのりだした。

ブランウェルは1835年秋にロンドンの王立美術院に入学が果たせず，画家になる夢は断たれたかに見えた。彼がハワースに戻るとまもなく，エミリがロウ・ヘッドから帰ってきた。ふたりともハワースから外に出て，打ちひしがれて故郷に帰ってきた者どうしだった。その後2年間，ブランウェルはハワースの牧師館に留まることになる。ブランウェルは自分のほんとうの仕事は画家ではなく作家であると思いなおし，幼い頃から読み親しんできた『ブラックウッズ・マガジン』の編集部あてに1835年12月に手紙を書いた。だが返事は来なかった。

ブランウェルはアングリアに没頭した。アングリアはロウ・ヘッドのシャーロットにとっても精神的な支えになっていた。ブランウェルとエミリの不成功によって，シャーロットが「義務と必要」(1835年7月2日，エレンあて)に仕えるべき理由はなくなっていた。かれらを献身的に援助するという目的がなくなった今，学校の仕事はいっそう耐えがたいものに感じられてきた。冬休みに帰省すると，シャーロットとブランウェルはそれぞれ詩人のワーズワースとサウジーに自作の詩を送って評価を仰ぐことにした。シャーロットがサウジーに最初に送った手紙は残存していないが，サウ

ジーからの返事と，それに対するシャーロットの礼状は残っている。いっぽうブランウェルがワーズワースに送った手紙は残存しているが，彼が返事をもらった形跡はない。シャーロットは返事をもらったものの，その内容は期待したものではなかった。そこに書かれていたのは，作家になるという野望は捨てるようにという助言であった。

1837年夏，ミス・ウラーは寄宿学校をそれまでのマーフィールドのロウ・ヘッドから，デューズベリ・ムーアに移転した。病気の父親の看病とそれにつづく死去のために，ミス・ウラーは学校を留守にすることが多く，シャーロットは休暇中のところを呼びもどされたり，仕事をまかされることが多くなった。いっぽうエレンは1837年2月からロンドンの長兄ジョンの家に滞在しており，その後も3番目の兄ジョシュアの家族が住むバースイーストン（バース近在）を行き来するなどして，ブルックロイドには不在であった。

さらに夏休みが終わったころから体調を崩していたアンの扱いについて，シャーロットはウラー先生と意見が対立し，12月にはアンは学校をやめて帰宅することになった。いっしょに帰ったシャーロットは年が明けて1838年1月末には学校に戻ったものの，アンが去りエレンもロンドンの兄の家に滞在中で話し相手もなく，孤独のなかで神経衰弱に陥った。5月には医者の忠告で帰宅することになった。久々に牧師館にブロンテ姉弟妹が全員そろうことになったかに見えたが，ブランウェルは伯母や父の友人たちの資金協力をえて6月からブラッドフォードにスタジオを構え，肖像画家として再スタートした。

41（56）　「ブラックウッズ・マガジン」編集者へ

1837年1月9日

手元にちょっとした作品のございますことは，以前の手紙でそれとなく申し上げました[1]。出来ばえはさておき，その構想についてはこれまでの『ブラックウッズ・マガジン』に掲載されたいずれの作品に勝るとも劣りません。とはいえとうぜん散文で書かれ，しかも相当な長さがあり，そのうえかなり風変りな作品であるため，手紙では意を尽くせません。それゆえお目もじかない陽の目を見られるものならば，300マイルの旅も厭いません。

つきましては会見をご了承いただき，たとえ30分でもお会いくださるとの返事をいただけるようお願いする次第です。お許しなさって後悔するようなことがあれば，非はひとえに当方にございます。

間違いなく人助けとなり，またご自身にとってもお為になるとわかっていながら，なおわずか一行をしたためる労をもお厭いなさるのでしょうか。なにを退けだれを拒んでいるかもご存じないままに，煩わしいということのみで一言のお言葉も下さらないお積もりなのでしょうか。あなたの雑誌が非のうち処なくて，もはや何を付け加える必要もなく，また付け加えようもないとお考えなのでしょうか。いったいあなたを動かしているものはプライド――それとも習慣――さもなくば偏見なのでしょうか。どうか男らしく，そんなものには目もくれず，お返事を下さい。訪問を待つとお書きくだされば，喜んでお受けいたします。これがうまくいけば双方にとって益することでしょう。仮にうまくゆかずとも，なお利はございます。なんとなれば成功の見込みなきことを，本人が納得いたすからであります。

（ブランウェル・ブロンテ）

1）ブランウェルは数回にわたって『ブラックウッズ・マガジン』編集部に手紙を送っている。保存されていた1835年12月（7日）付けの手紙には，それ以前にも2通書いたことが記されている。翌36年4月8日には，自作の詩

を送っている。(「ブロンテ書簡研究（1）」pp. 255―257参照。)

42 (57)　ウィリアム・ワーズワースへ

ヨークシャ，ブラッドフォード近在ハワース
1837年1月19日

拝啓―――お便り致しましたものにつき，ぜひご一読いただき，ご意見をお伺い致したくお願い申し上げます。この世に生を受けてより，19歳〔20歳？〕になろうとする今日まで，人里離れた山あいに暮らし，自分がいかほどの者であり，何を成しうるか判じかねております。飲食するのと同じつもりで書物に親しんで参りました。それが真に自然な欲求であったからです。書くことも話すのと変わらぬ気持ちで―――気の向くまま感じるままに―――筆をとりました。止めようもありません，沸き上がるものを抑えることができなかったのです，ただそれだけです。自惚れという点については，人からお世辞を言われて得意になった覚えはありません。なぜなら今日まで，わたしが一行でもものを書くことを知っている人間は，この世に5，6人とはございませんから。

しかし今，ひとつの変化が生じました。私も何かをしなければならない年齢となったのです。明確な目的のために，もてる力を駆使しなければなりません。その力がどのようなものであるか，自分ではわかりかねますので，他人にその価値を見極めていただかなければならないというわけです。ところが当地にはそれに答えられる人がいないのです。仮にその力が取るに足らないものならば，これ以上だいじな時間をむだにするわけにはいきません。

わが国の文学においてもその作品をもっとも敬愛し，また神にも等しき知性の持主と仰ぎみるそのお方にたいして，こうして大胆にもお便りしたのみならず，愚作のひとつを送りつけ批評をあおぐ非礼をお許しください。どなたかその人の判決に対しては何の控訴もできないような方の前に，私は我身をゆだねなければなりません。その方は詩を創作するに留まらず詩論をも展開し，そのいずれもがこれから一千年にもわたって人々の心のなかに生き続けることでありましょう。

わが意とするところは世に出ることであります。そのためには詩だけでは心許なくおもいます。詩によって船を漕ぎ出すことは叶っても，帆を進めることはできません。知的で論理的な散文，それを自分の得手として研鑽をつんで参りましたが，それによって世間の注目をさらに引くことが出来ましょう。そしてまた詩はさらに輝きをまし，その名を栄光で包んでくれることでしょうが，それもこれも手段なくしては始まりません。なにも持たない私はあらゆる方法を講じてそれを獲得しなければなりません。そして今日のようにろくな詩人が見あたらない以上，よりましな人間が進出できるよう門戸は解放されるべきであります。

お送り致しましたものは，ずっと長い作品の序文の一部であります。そこでは激しい情熱と脆い道徳心が，遙かな想像力と鋭敏な感情と葛藤するさま，そして年を経るにつれて若さもかたくなとなり，放蕩も浅い愉しみもいつしか肉体と気力の衰えの中で惨めに失われていくさまを描こうとしたものです[1]。ご覧になるものは，想像力の強い子供の作文という以上の見せかけはいたしておりません。しかしながら，ご一読くださいますように。闇のなかをさまよう者に光をさしの伸べるように―――ご自身のお心の優しさを重んじるように―――どうかお返事をください[2]。たとえ一言でも，創作を続けるべきか否かをお教えください。つい感情的になってしまいました。お許しください。この点についてはどうにも冷静ではいられないのです。心から尊敬申し上げております。あなたの忠実な僕より。

P・B・ブロンテ

1）ジェランは，ブランウェルがワーズワースに送った詩は'Still and bright, in twilight shining'(8.8.1836)であるとしている。(Gérin, *Branwell Brontë*, p. 126)手紙の文面から判断して，それはアレグザンダー・パーシーを主人公とした叙事詩の序文と考えられる。
2）ワーズワースは返事を出さなかった。後日，彼はブランウェルの手紙について「見え透いたお世辞と，ほかの詩人に対する揶揄だらけ」であったとサウジーに語っている。

43（58）　　ロウ・ヘッド1837年2月20日

手紙を読みながら心が萎えていく気がします。エレン———あなたなしで私になにができるでしょうか[1]。なぜわたしたちの交際はこれほどまでに阻まれなければならないのでしょう。信じられぬ運命といえます。あなたにお逢いしたい。あなたとともに過ごす数日間，数週間が，少し前からわたしのなかで育まれつつある思いをかぎりなく高めてくれるような気がするのです。あなたが指し示してくれた道を，わたしはおずおずと歩みはじめようとしていました。なのにあなたがいない今，わたしはたったひとりで途方にくれながらたどるしかないのです。

どうしてわたしたちは引き裂かれなければならないのでしょうか。エレン，これはきっとわたしたちがたがいの愛を深めるあまり———神の造り給いしものを敬愛するあまり，造り主の神をないがしろにする[2]———おそれがあるからにちがいありません。はじめのうちは「神の御心のなされんことを」[3]などと唱える気にはとてもなりませんでした。抗おうとすら思いましたが，それは過ちであったことが今のわたしにはわかります。今朝，ひとりで神の御心のすべてに従えますように———それは今までとは比べものにならないほどの痛みを受けることになるでしょうが———と祈りました。それいらい前より心静かに謙虚に———そして幸福を感じるようになりました。先週の日曜日，すっかり落ちこんだまま聖書を読みはじめたのです。するとむかし感じたように，感動に震えました———まだ幼い少女だった夏の日曜の夕暮れどきのこと，開け放った窓辺で初期の殉教者いらいと讃えられた，清純にして気高く神聖なフランス人貴族の伝記を読んでいたときに訪れた，あの心なごませる平安が巡ってきたのです。わたしは大切なエレンのことを思いました———彼女が側にいたなら，わたしがどんなに幸せを感じていたか，神の御言葉の記されたページがなんと輝いて見えたかをお話しできたのにと。でも「兆し」は掻き消され，現実と罪が戻ってきたのです。エレン，あなたが発つ前にぜひともお会いしなければなりません。あなたがこちらへ来られないのなら，ご出発の時刻をお知らせくだされば，ブルックロイドまで歩いてでも参ります。イースターにお帰りにならないのなら，お母さまやお姉さまのお招きもお受けできないかもしれません。あなたのいないブルックロイドでは，わたしは惨めなだけです。けれど数日はむりとしても，数時間だけならおたずねしたいと思っています。あなたがいるからこそ彼女たちに親しみを感じるのです。この手紙は思いつくままに書きつけました。いつお手元に届くのか見当もつきませんが，準備不足でせっかくの機会を逸さないこと，と心に決めておりますので。それではごきげんよう。神のお恵みがありますように。愛しい友へ———さようなら。おそらく夏至のころまでにはお帰りでしょうね。なんとかならないものでしょうか。わたしがどんなにふさいでいるかジョンお兄さまがお知りになったら，たぶん憐れんでくださることでしょう。

1）エレンはロンドンの兄ジョンの妻が2月24日に男児を出産したため，姪たちの世話に半年ほど滞在することになった。
2）「ローマ書」第1章第25節'Worshipped and served the creature more than the creator'から。なお『ジェイン・エア』第24章でも類似した表現が使われている。

3)「マタイによる福音書」第6章第10節

44 (59)　シャーロット・ブロンテへ

ケズウィック，1837年3月[1)]

拝復――――おそらく12月29日付けのお便りへの返事は，もうお諦めのことでありましょう。手紙をお書きの頃，小生はコーンウォールのはずれにおり，2週間ほどしてからニューハンプシャーのわが手もとに届いた次第です。その後も随所をまわり，さらにロンドンにて3週間ほど多忙をきわめ，返事を差し上げようにも暇がございませんでした。ようやく我が家に帰りつくと，留守の間に仕事がたまり，その後かたづけに追われ，お手紙は書類のいちばん下にあって返事を書かないままになっていました。それがつまらないからとか，なおざりにしようという気持ちからではなく，じつを申せば返事の難しいことであり，また血気盛んな若者の夢に水をさすのは愉快なことではないからなのです。どのような方かは，ただお手紙から推察するばかりです。それは真剣に書かれたものとお見受けしました。偽名をお使いのようですが。そのことはともかくとして，手紙にも詩にも共通の特徴が窺われ，その気持ちのありようは十分に感じとることができました。わたしのことはお手になさった拙著などからお知りになられたのでしょう。たまたまわたしを一目ご覧になるなり，いくらかでも面識があったなら，あなたも興ざめしたことでしょう。晩年にさしかかった老詩人の姿を目にしたならば，そして夢も憧れも歳月の前にいかに脆いものかをご覧になったなら，あなたの情熱もいくらか醒めたことでしょうに。とはいえわたしは失意の人などではありません。「いっさい空なり」[2)]などという文句について，わたしの口から意気消沈させられるような説教は聞いたことはないはずであります。

あなたの素質について，わたしが求められているのは助言ではなくして意見ということでございます。しかしながら意見などはどうでもよいことで，助言のほうがはるかに有益かと考えます。あなたには明らかに，しかも少なからざる程度にワーズワースのいう「詩才」が見られます。これは昨今さほど珍しくはないと申しても，軽んじているわけではありません。毎年たくさんの詩集が出されますが，読者からは顧みられずにおります。そのいずれもが半世紀前に世に出ていたならば，大いなる名声を勝ち得たに違いないと思わせるものばかりです。つまりこのようにして名を揚げようと思うものは，誰かれなくこうした失望を覚悟せざるを得ないということなのです。

ご自分の幸せを考えるなら，才能に磨きをかけるのは名声を当てにしてのものであってはなりません。文学を業とし，それに人生を捧げ，そうした選択を一瞬たりとも悔いたことのない私ではありますが，それでもなおわが義務として感じていることがあります。それは私に励ましや口添えを求めてくる文学志望の若者たちに対して，こうした危険な道を取ることのないように警告を発することであります。女性にはその要はない，危険はありえないのだからと仰るでしょう。ある意味では確かにそのとおりです。しかし衷心から警告申し上げたい危険が一つございます。あなたが日頃浸っておられる白昼夢は，不健全な精神状態を引き起こしかねません。日常の些事が何から何まで退屈で無益に見えてくるにつれ，ほかに向いた仕事も見いだせないままに，それらの仕事に不向きになってしまうことでしょう。文学は女子一生の仕事とはなりえませんし，またなるべきでもありません。女性の本来の務めに励むなら，たしなみであれ楽しみであれ，文学にいそしむ暇などなくなるはずであります。あなたはまだそうした義務についてはおられませんが，時至れば名声を求める気持ちなど薄らいでいくことでしょう。想像の世界で興奮を求めることもなくなることでしょう。そうしたものは，あなたがこれからどのような状況に身をおくことになるにせよ，この世の浮き沈

みや逃れえない心配事が，嫌というほどもたらしてくれるものなのですから。

しかしながらあなたの才能を評価していない，あるいはそれを生かしたいという気持ちを挫こうとしているなどとは思わないで下さい。わたしが願っていることはただ，あなたの末永い幸福に繋がるかたちで，その才能について考え駆使していただきたいということなのです。詩を創るのなら，それ自身を目的となさい。競争心をもたず，名声を求めないことです。欲せざれば，逆にいっそうそこに近づくものです。そうしたやり方ならば詩作には何の問題もなく，心を慰め励まされる，宗教につぐものとなりえましょう。詩のなかにあなたの最善の思いをこめ，それはいっそう鍛えあげられることでしょう。

さようなら。このような書き方をしたからといって，かつては自分にも若い日があったことを忘れたわけではないのです。むしろ覚えていればこそなのです。誠心誠意であることはお信じいただけるものと思います。ここに書かれていることが，今のあなたの考え方や感じ方にはいかに一致しないように思われても，やがて年を経るにつれ，そのことの道理がおわかりいただける日が来るものと思います。ですからたとえ不愉快な助言者であっても，あなたの現在および将来の幸福を願ってあなたの真の友として署名することをお許しください。

ロバート・サウジー

1）Robert Southey (1774-1843) からの返信。この時サウジーは62歳で，湖水地方ケズウィックにあるGreta Hallに住んでいた。1813年に桂冠詩人となり批評家としても成功していたが，私生活においては不幸な結婚，子供たちの死などに見舞われた。シャーロットの手紙が着いたころも，前年に亡くなったコールリッジの死を悼み，生まれ故郷の西部地方をめぐっていた。

2）サウジーの代表的叙事詩'The Curse of Kehama' (1810) の一節から。なお原文は次のとおりである。
They sin who tell us love can die./ With life all other passions fly,/ All others are but vanity.

45（60）　ロバート・サウジーへ

ロウ・ヘッド，1837年3月16日

拝啓――お返事を差し上げるまでどうにも心が落ち着かず，ご迷惑も顧みず重ねてお便り申し上げました。ご親切で良識あるご忠告を賜わり，一言御礼申し上げずにはいられなかったのです。お返事をいただけるとは夢にも思っておりませんでした。あのように思いやりと気品あふれるお便りを。自分を抑えなければ，なんて感情的な人だろうと思いになられることでしょう。

最初にお便りを読ませていただきました時には，大胆にもあのように稚拙な詩をお送りした自分が軽率だったと恥入り，ひたすら後悔するばかりでした。かつてはあれほどの喜びを与えてくれたのに，今ではただ困惑をおぼえるばかりとなった紙の束を思うと，熱い痛みが顔をよぎります。けれど気をとりなおし，いくどもお便りを読み返しているうちに，意味がわかって参りました。詩作は無用のことというのではなく，また私の書くものに才能の片鱗もないとおっしゃっているわけではありません。ただ空想の楽しみに耽けるために，また名声を得ようとして，あるいは競争する興奮に浸りたいという自己本位な気持ちから，女性としての本来の務めをなおざりにする過ちを警告しておいでだったのです。なすべきことをきちんと果たすなら，詩それ自体を目的として，つまり心酔わせる純粋な喜びのために詩作することはお許しだったのです。私のことをさぞかし愚かな者とお思いのことでしょう。初めて差し上げたお便りが何から何までたわ言であったことは承知しておりますが，わたし自身はけしてそこから推察されるほど怠け者でもなければ，夢想家でもないつもりでございます。

父は牧師で一定の収入がありますが，その額はささやかなものです。長女の私にたいして，父は他の子供たちと分け隔てなくできる限りの教育を授けてくださいました。そんな事情から，わたしは卒業した時点で家庭教師となることを自分の義務と考えていました。いざ仕事についてみますと，それは一日中わたしを，頭ばかりでなく身体も拘束するに十分なものであるとわかりました。夢ひとつ見る時間もないのです。たしかに夕暮れにもの思いに沈むことはありますが，だからといって他人に迷惑をかけるようなことは断じてありません。自分の考えていることを人に漏らしたり，変わっているなどと思われることがないように気を配っております。さもなければ私が何をしているか，周囲の人々から疑惑を招くことになりかねません。父の言葉を守って———お手紙の温かく知的な語り口そのままに，父は子供の頃からわたしに諭してくださいました———女としての務めを忠実に果たすというだけでなく，それらに深い関心を持つよう務めて参りました。必ずしもうまくはいきません。というのも時として教壇に立ちながらも，あるいは縫物を手にしながらも，本を読みたい，ものを書きたい，そんな思いが胸をかすめるのです。けれどそうした自分を押しとどめなければなりません。そんなおり，父の理解が何よりの慰めです。今いちど心より感謝申し上げます。自分の名前を活字にしたいなどという野心はもはや抱いたりはしません。そうした願望が頭をもたげましたなら，お手紙を読み返し自戒いたしたく存じます[1]。私にとってあなた様にお便りし，お返事まで頂戴したというだけでも，すでに身に余る喜びでございます。お手紙はあだやおろそかにはいたしません。私とお父さま，弟や妹たち以外には誰の目にも触れさせません。重ねて御礼申し上げます。もう二度とお煩わせすることはないでしょう。この先30年の歳月が流れ老婆となりました頃，このことを鮮やかな夢として振り返ることでございましょう。署名とお思いになられたようですが，わたしの本名でございます。したがって再度ここに署名いたします。

1）シャーロットはサウジーからの２通の書簡を封筒にいれ，表書きに次のように記した。
'Southey's advice to be kept for ever. My twenty-first birthday. Roe Head. April 21. 1837'

46 (61)　シャーロット・ブロンテへ

ケズウィック，1837年３月22日

拝啓———お手紙うれしく拝読し，そのことをお伝えせずにはいられない気がいたしました。苦言を素直にお聞き入れくださいました。わたしがおります間に，もし湖水地方にお出かけのことがございましたら，ぜひともお立ち寄りください。そうすれば今後もいっそう好意をもっていただけるでしょう。というのも歳月を重ねさまざまな事物を見てきましたが，わたしは頑固者でもないし気むずかしやでもないことがおわかりいただけると思いますから。

私たちがあるていど自分を律する力をもっていることは，神のお慈悲といえましょう。それは自らの幸福にとって欠かせないばかりか，周囲の者たちの幸福にも大きく貢献するものだからです。感情に流されないように心がけ，平常心を保つよう務めなさい。(お身体のためにも，それが最良の助言かと思います。) そうすれば知力に付随して精神もまた向上していくことでしょう。

それでは，神のご加護を祈っております！ごきげんよう。真の友より。

ロバート・サウジー

47（62）　　（ロンドン，クリーヴランド・ロウ）

デューズベリ・ムーア[1]，1837年6月

愛するエレン――――お望みどおり，手紙を届けていただける折をずっと待っていましたが，思うようにそうした機会が訪れないので，あきらめて郵送することにいたしました。これ以上ぐずぐずしていては，関心がないと誤解されるのでないかと不安になったのです。ふたりを隔てる距離や再会までの時間の長さを実感することがなかなかできません。エレン，かくべつお伝えするようなニュースもありません。またお知らせしたいような変事もないのです。この間お会いしてから，こちらの生活は変化に乏しく，朝から晩までただ教えるのみです。なにか強いて変わったことといえば，あなたからのお便りが着くとか，なにか新しい興味ひかれる本に出会うことくらいなのです。最近では『オバーリンの生涯』[2]とリー・リッチモンドの『家庭の肖像』[3]を読みました。後者にはとても心ひかれ胸うたれました。すぐにでもその本を買っていただくなり，借りるなり盗むなりして「ウィルバーフォースの思い出」の章を読んでみてください。取りたてて事件らしい事件もない短い生涯についての簡潔な記録を，わたしは決して忘れないことでしょう。心ひかれるのはそこに細々と描かれた事件のゆえではなく，ひとりの若く才能豊かで真摯なキリスト教徒の生と死を語る虚飾のない語り口のためなのです。エレン，その本を手に入れ（わたしが持っていたら，プレゼントしたいのですが），お読みになったら感想を聞かせてほしいです。ロンドンに着いていらいお加減がすぐれなかったことを，昨日になって知りました。どうしたことでしょうか。今は良くなられたのでしょうか。環境になじむように努め，わたしが知っているあなたの内に秘めた忍耐強さで対処していただきたいと願っています。あなたがこちらにいないのだと思うと心に穴が開いたようで，これまでのところそれを埋める手立てもないままです。毎晩忘れることなく10時にはお祈りをしています。あなたのお幸せを願うわたしの祈りが，もしお聴き届けいただけるなら，それはあなたの上に訪れることでしょう。「義人の祈りは力強く効果があるもの」[4]と聖書にあります。私は心正しき者とはいえませんが，真摯な祈りは，神もむげにはお見捨てにならないものと信じます。お姉さまにぜひよろしく申し上げてください。そしてあなたの可愛い姪御さんのジョージアナ[5]にくちづけを送ります。お会いしたことはありませんが，その叔母さまを思えばどうして愛さずにいられましょう。愛するエレン，さようなら。もうこれいじょう書いてはいられません。厭わしい仕事に呼ばれていますので。冬までにはぜひお帰りくださいますように。あなたにお会いする望みもなしに，どうしてこれからの半年を過ごしたらよいのでしょうか。長い長いお便りをすぐに下さい。乱筆乱文をお許し願います。

1）ミス・ウラーはラウズ・ミルの老いた両親の世話をするために，学校をロウ・ヘッドからデューズベリ・ムーアに移した。病気がちの父親が死亡すればラウズ・ミルは兄の所有となるため，ミス・ウラーは残された母のために住居を用意しなければならなかった。そのためロウ・ヘッドの居住権を売り，より小さく質素なHeald's Houseを購入し，学校の移転を決めた。この屋敷はバーストール教会の牧師を父子2代にわたって務めたHeald家の所有で，シャーロットも彼らとは知り合いであった。

2）原注：*Brief Memorials of Oberlin* (1830)のこと。Johan Friedrich Oberlin(1740-1826)はフランス北東部アルザス地方の牧師で，教育の先駆者であった。

3）Legh Richmond, 'Domestic Portraiture'

4）「ヤコブ書」第5章第16節

5）原注：エレンの姪。兄リチャードの娘。

48 (63)

愛するエレン———同封したものはお気づきのとおり，あなたのお便りをいただく前に書いたものです。今ごろまでには投函してあるはずでしたが，お手紙を読んで気が変わりました。あなたのお手紙を根拠に望みをつなぐ勇気はありません———これまでなんども落胆させられてきましたから———あなたを帰してほしいなどとは言えないでしょうが，でもできるだけ頼んでみるつもりです。とにかくまもなくお会いできる機会があるかもしれないのだから，心を落ちつけましょう。あなたがまだロンドンをお好きになれないということに，わたしは身勝手ながらとても喜びを感じています———あなたの愛情が変わっていない証拠のように思えるからです。ほんとうにもう一度ハワースのヒースの荒野にいっしょにたたずむことができるのでしょうか。あまりに希望的な観測をする勇気がありません。いろいろ難しい問題が見えますもの。でもウラー先生に許可を願い出て，もう半分は許しを得ているので，明日また出かけて問題など片づけてしまうつもりです。

わたしの可愛いペンパルのジョージアナに愛を送ります。親愛なるエレンへ。

———37年6月8日

C．ブロンテ

49 (64)

バースイーストン，バース[1)]

デューズベリ・ムーア，[1837年8月24日]

愛するエレン———人づてに手紙を届けていただこうと長いあいだ待ちましたが，いっこうに機会がありませんので，郵便で送ることにしました。あなたのことを忘れてしまったと思いはじめ，仕返しにわたしのことなど忘れてしまうことにするといけませんので。

この手紙の日付けでお気づきかと思いますが，わたしはまたデューズベリ・ムーアに戻って，これまでどおり仕事を続けています。教えて，教えて，教えるだけです。クリスマスにはミス・エライザ・ウラーとミセス・ウラーがこちらに来られる予定です。そうしたらミス・ウラーはエライザに学校を譲るでしょう。でもわたしはあの立派な方が，その後もここに住む予定なのは嬉しいです。いろいろ欠点はあっても，彼女と別れるのは悲しいですから。

いつになったらお帰りですか。急いでください。バースには長逗留して目的は達成されたでしょう———きっともう十分に洗練されたことと思います。ワニスを塗りすぎると下にある木地が隠れて見えなくなってしまうでしょう。そんなことは，あなたのヨークシャーの旧友たちには耐えられません。来て，来てください。あなたのお留守にはほんとうにもう飽きあきしました。土曜日がなんどめぐってきても，ドアをたたく音がして「ミス・エレン・ナッシがお出です」という声を聞く望みはないのです。わたしのこの単調な生活のなかでは，それだけが楽しみだったのです。またそれが戻ってきてほしいものですが，こんなに長いあいだ離れていたのですから，ぎこちなさが消えるまでには2，3回お会いしてからでなければだめかもしれません。なにもお知らせすることはありません。ただメアリ・テイラーが良くなったことと，彼女とマーサがウェールズ地方へ旅行に出かけたということくらいです。2週間ほど前にパティ[2)]がポニーで来て，この重要な計画を立てているところだと言っていました。彼女はあなたの長い留守について心配しはじめ，ぜひ帰ってきてほしいといっていました。マーシーお姉さまから，ジョシュア夫妻がひと冬いてほしいといっていると聞きましたが，耳を貸してはいけません。エレン，もう長いこと家を離れているではありませんか。もう帰るべきです。アン・カーターの訪問を受けました。彼女はいつもの休暇より数週間ほど長く帰省していました。この間，彼女とはなんども会いましたが，物腰がすこし洗練されたという以外はすこしも変わっていません。心暖かで，愛らしく，決めつけるところがあって，美しい顔だ

ちをしていることは昔のままです。この手紙が届きしだいお便りください。こんなお便りしかできないことを恥じるべきでしょうけれど，恥ずかしいのは通り越しました。

さようなら，わたしのエレン。近くまたお会いできますように。神の祝福を。

C．ブロンテ

ウラー先生はいま不在です。そうでなければきっとあなたによろしくとおっしゃるでしょう。エドワード・カーター坊や[3]と妹の赤ちゃんが滞在していますので，子守りと勉強とで大忙しです。これまでのところきわめて健康です。このままいけばよいのですが。

1）エレンは3番目の兄Joshua(1798-1871)の家に滞在していた。彼はバース近隣の村Batheastonの牧師補を4年間務めた。
2）Patty　メアリ・テイラーの妹マーサの愛称。
3）Edward Carter　ウラー先生の妹のひとりSusanが結婚しMrs Carterとなっていた。エドワードはその幼い息子。シャーロットは彼女たちの滞在中，こどもの世話まで任されることがあった。

50（65）

バースイーストン，バース
デューズベリ・ムーア，1837年10月2日

愛するエレン――1週間前にお便りするべきでしたのに，このところのあまりの忙しさにお返事する間もなく，とうとう今日になってしまいました。わたしの遅れがちな手紙に早々にお返事くださって，心から感謝しています。自責の念を覚えました。お便りをいただいてから2，3日後に，お姉さまのマーシーに会いたいと思ってブルックロイドまで足を伸ばしました。お姉さまの加減がよくなかったことはお聞き及びでしょう。だいぶ良くなられ，もっぱら鶏小屋や鳩小屋，とくにもうじき雛がかえるというので夢中でした。マーシーには心優しいところがあって，わたしはそれが好きなのです。アンお姉さまはひどく元気がなさそうでした。お母さまはいつもより少しご機嫌のように見えました。みなさん，あなたのお帰りを心待ちにしていらっしゃいました。テイラー家の皆さんがウェールズから帰って来られました。3週間ほど海岸のアバリストウィスに滞在していたのです。メアリにはまだ会っていませんが，2，3日前にマーサが馬で来て向こうでのようすを話してくれました。それによるとメアリの健康はあまり回復していないようです。でもお医者さまたちの意見では，悪いのは肺ではなく胃のほうらしく，これは希望のもてる話だと思います。妹のエミリはハリファックス近くの生徒40人くらいの大きな学校の先生になりました[1]。あちらに行ってから一度便りがありましたが，それによると仕事はなんともひどいのです――早朝6時から深夜11時ちかくまで激務に追われ，その間に休み時間はわずか30分しかないのです。これではまるで奴隷です。とても続かないのではないかと思います。気心のあった友が何人かできたと聞いて，とても嬉しくおもいます。心なじめない風景，物音，人々のなかで暮らさなければならないことほど苦痛なことはありません。お手紙からあなたの気持は常と変わらず，新奇なものに目を奪われたり，悪しき例にゆがめられることはまったくないようにみえます。とても嬉しいです。＊＊＊に関する文章には笑いを禁じえませんでした。純粋で世間知らずな初な感じがありました。エレン，よいこと，人にはだれでも暗い面があるものなのです――その欠点に美しいベールをかけることのできる人もいますが。親しくつきあううちにそんなベールはゆっくりとはがれ，染みがひとつひとつ浮かんできて，完全無欠なはずの模様のうえに，どんなにひいきめであろうとも見逃すことのできない染みが一面ににじんでいるのを，目のあたりにせざるをえなくなるのです。つぎにお話しするときは，曖昧な手紙を通じてではなく，たがいに向い合ってしたいものです。あなたを天にましまします神の御

心にゆだねます。あなたの変わらぬ友，愛するエレン。

C・ブロンテ

1）エミリは1835年10月にロウ・ヘッドをやめてからずっとハワースに留まっていたが，自活の義務を感じてHalifax近在のLaw HillにあるMiss Elizabeth Patchettの寄宿学校の教師になることを決心した。学校はパチェット姉妹がふたりで経営していたが，ひとりが結婚して辞めたため，エミリが助教師に雇われた。任期ははっきりしていないが，半年ほど務め1838年４月に辞めたというのが通説になっている。

51 (66)　　1838年１月４日

たとえお叱りであっても，お便りは嬉しい驚きでした———お約束，忘れていたわけではありません———お使いの方が次に見えるときにお渡しできるよう，手紙を用意していました。ところが事情が変わって，それが不要になったのです。急に帰宅することになった理由については，お察しのとおりです。アンの容態が思わしくなく，胸の痛みも息苦しさもなかなか収まりませんでした[1]。苦しんでいる彼女を前に，どうして平静でなどいられましょう。アンにあまり関心のない方に，わたしと同じ気遣いを期待してもむだでした。ウラー先生はわたしのことを頭がおかしいのではと思われ，ご自分の意見が正しいことを示そうとするかのようにわざと冷たくなさいました。ある晩，話し合おうということなり，わたしがきっぱりと真実を申し上げたところ，先生は泣き出され，翌日，わたしには内緒で父に手紙を書いたのです。わたしが先生のことをひどく責め罵ったと。手紙が着いた翌日に，父はわたしたちを迎えによこしました。わたしの方はウラー先生のもとを去り，今後一切かかわりをもたないと決心していました。出発まぎわになって先生はわたしを自室にお呼びになり，いつもは感情を表に出すことのない方なのに，その時はさすがに抑えきれずにおっしゃいました。冷たく邪険にしたけれど本当はあなたのことを好きだし，別れるのはたいへん悲しいと。わたしは好意をよせてくれる人は，好きにならずにはいられません。それに先生はたいていはとても親切にして下さっていたことを思いだし，こちらが折れて，お望みならばまた帰って参りますと申しあげたのです[2]。こうして当面，問題は解決いたしました。けれど不満が残ります。先生は２日２晩も泣き明かしたりせずに，このわたしを追い出していたら，その方がずっと尊敬できたでしょうに。わたしは例によってかっとしてしまい，激しやすい性格を抑えることができなかったわけです。それは欠点である以上，自慢にはなりませんが，けれど恥ずべきこととも思いません。なぜなら怒るべき理由があったのですから。アンはいまではだいぶ良くなりました。まだ充分な介護が必要ですが，それでもわたしの最大の不安は消えました。

あなたのご計画はすばらしいものだと思います。ただし詩編を暗記するというのはいかがなものでしょうか。あまりはっきりした益はないものと思います。新年になりましたが，この一年もまた昨年とおなじように暗く汚れた一年になるのでしょうか。わたしたちのあらゆる罪，過ち，隠された虚栄心，抑制しえない激情，生まれもっての気質ゆえに。そうはならないと思います。でも何もかも矯正され———より謙虚にあるいはより純真になった———とは実感できません。愛するエレン，どうかできるだけ早くいらして下さい。他の人たちには時としていかに激しい憎しみを抱いても，穏やかで変わらないあなたの友情を思うと，心慰められ気持ちがなごみます。あなたがわたしのような激しやすい愚か者でないことに感謝しています。お母さまとお姉さま方にくれぐれもよろしく。乱筆をお許しください。あなたの変わらぬ友より。

C・ブロンテ

1）アンは1836年秋頃から体調がすぐれなかった。咳が続く妹を，シャーロットは肺結核ではないかと心配した。

だがアンの不調は身体的な問題というより，宗教上の悩みに由来するものであった。アンもシャーロットと同じように，自分は救われるに値しない人間ではないかという深刻な悩みのなかで鬱状態におちいっていた。彼女はモラヴィア派の牧師James La Trobe師との面会を求め，その人間的な温かみのある「信仰による救済」の考え方によって救われた。

2）シャーロットは1月30日にはデューズベリ・ムーアに戻った。

52（67）[1]　　［1838年5月5日］

親愛なるエレン———あなたがご病気だったことを昨日知りました。ヘルドさんとお嬢さんがデューズベリ・ムーアにいらして，彼らから聞いたのです。もっと詳しいことを知ろうと，今朝ブルックロイドまで出かけてみました。今しがた帰ってきたところです。お母さまはとても心配していらっしゃいました———あなたの名前をいうだけで涙が溢れてくるのです———お母さまもマーシーももういちど家であなたに会いたいと切に願っています。かわいそうに。2週間も病気で床に伏していたのですね。その間じゅう，わたしは手紙をくれないことを心のなかで責めていたのです。介抱してくれる優しい女友だちもなく，あなたは病気に苦しんでいたのです。イースター休暇にブルックロイドを訪問できていたらもっと早くこのことを知って，すぐにもお見舞いの言葉を送れたはずなのに。ウラー先生のお父さまが危篤になり亡くなられたため，急にデューズベリ・ムーアに呼び戻されてしまい，それもかないませんでした。以来わたしは2週間と2日，まったくひとりきりでいます———ウラー先生はラウズ・ミルに行っています。お便りを出せなかったのはあなたのことを忘れたからとか，もう好きでなくなったからなどではないことが，おわかりいただけるでしょう。もうずっと前にそう決めつけていたのではないかしら。ほんの2行でも書く元気が出てきたら，回復したことをお知らせください。でもお身体にさわるようでしたら，一言も要りません。エレン，お家ではあなたはかけがえのない人なのですよ。みなさま，遠くで病気をしているあなたのことを思いやっておられます。元気で家にいれば口にすることもなかったかもしれない愛のことばが聞かれました。マーシーがいっていました。ジョージがあなたのことを心配するあまり，自分が病気になりそうだったそうです。あなたのお友達（わたしも含めて）が，胸痛める原因がじきになくなることを願います。あなたの病気についてはまだはっきりとは知りません。その程度や，またそれがどのくらいまで治ったのか。すべて話していただけるときがきたら，どんなにささいなことでもわたしには関心があります。気分はいかがでしたか。あまり沈みこんではいなかったでしょうね。それこそ病気のいちばん憂鬱な結果ですから。今のところは，バースには行かないでしょうね。奇妙な計画を立てているように思われました。あなたの将来の見通しについてあなた自身の考えをお聞きしたいです。ホワイト・リー・バーでお別れしたとき，ほんのしばらくのお別れなのに，それまでになく悲しい気分がしました。虫の知らせを気にするなんて愚かですが，たしかにわたしたちの再会がこのときほど不確かで遠いものに感じられたことはなかったのです。エレン，わたしは確信しています。あなたは多くの試練———あなた自身が，そして身内の方々がさいきん味わされた苦悩———のなかにあっても，それでもあなたは天を見上げ，試練のなかに支えを，苦しみのなかに慰めを，騒乱のなかに静けさを見いだすことができたのです。人間がいかにもがいてもどうにもならないところを，あなたの正しい心は，人生の悩みごと，心配事，些事から身を引き，この世ならぬ清らかな源から平安をえるすべをご存知なのです。あなたはただ黙して他に知られることなく，それを行うすべを知っているのです。あなたは聖書がわたしたちに与えてくださる神との魂の交流をもつことができるのです。お母さまとお姉さまから，くれぐれもよろしくとのことです。おなじ

包みに入れたわたしの気持ちもお受けとりください。それがいちばん小さなものということはないと思います。さようなら，愛しいエレン。

C．ブロンテ

1）原注：エレン・ナッシはこの手紙のうえに「ロンドンで病気だったとき」と記している。

53 (68)　　ハワース1838年6月9日

愛するエレン———あなたからのお便りの入った包み，水曜日に受け取りました。メアリとマーサ・テイラーが届けてくれたのです。ふたりはハワースに数日滞在して，今日は帰ります。そこで帰ったらあなたの知合いの方に渡していただこうと思い，急いでこの手紙を書いているところです。日付けをご覧になって驚いていらっしゃることでしょう。デューズベリ・ムーアにいるはずなのですから。こちらでできるだけゆっくり静養していたのですが，これ以上の滞在はわがままますぎて，さすがに言いだしかねます。体力も気力もすっかり萎え，お医者さまから死にたくなかったら帰省するようにといわれました。それで帰ってきたわけなのですが，環境が変わると元気が出て，心慰められ，今ではだいぶ元に戻りつつあります。エレン，あなたのように冷静で温厚な人には，今こうして手紙をつづっている惨めな人間の気持ちなどおわかりにならないだろうと思います。筆舌に尽くしがたい精神的かつ肉体的な苦痛のなかで何週間かを過ごした後に，ようやく静寂と平安がふたたび巡ってきた時の思いを。わたしはこのことを詳しく書く気にはなれません。この半年間の経験はわたしにとっては何もかも苦痛でしたし，あなたにとってもそれは聞いて心愉しいものであるはずがないと思います。メアリ・テイラーのようすはあまり良くありません。こちらにいるあいだ，注意深く見守っておりました。快活で顔の色艶にだまされますが，息切れや胸の痛みがあり，時おり発熱して顔を火照らせています。こうした症状にわたしがどれほど心悩まされるか，お伝えしようがないほどです。どんな医学も救えなかった2人の姉たちのことが思い出されてならないのです。きっと彼女は回復するものと信じます。たしかにまだ肺浸潤にはなっていませんし，咳もでるわけではありません。それに脇腹の痛みもないのですから。熱っぽいのもおそらく冬の厳しい寒さと春が遅かったせいで，きゃしゃな身体にこたえたという一時的なことなのでしょう。マーサも今ではすっかり元気になりました。滞在中はいつも陽気で，とても可愛かったです。お便りの様子から，冬になる前にお会いできる望みはなさそうに思います。あなたのためには，それを喜びましょう。社交界を知ることで，あなたの心がわたしを離れてしまうなどとは思いません。あなたの作法はみごとに洗練されることでしょう。そして一般的にはそうした身ごなしから，その人の品性も評価されるものだと思います。まわりで大騒ぎしているので，もうこれ以上は書けません。メアリはピアノをひき，マーサはその可愛い舌を精いっぱい回転させておしゃべりに夢中です。ブランウェルはわたしの前に立ったまま，にぎやかなマーサをみて笑っています。愛するエレン，さようなら。おばさまと妹たちがよろしくと言っています。さようなら。

追伸　時間の許すかぎり，なるべくたくさんのお便りをください。

(六) 1839年

3年半あまりにわたった教師生活も失敗におわり，作家への夢も閉ざされたなかで，シャーロットは23歳の誕生日を迎えようとしていた。1839年はそれまでの単調な日々に比べ，求婚やはじめての家庭教師など変化の多い一年であった。そうした現実的な人生との関わりのなかで，シャーロッ

トが10代のはじめから書き続けてきたアングリア物語は終焉を迎える。

1839年3月，シャーロットはエレンの兄ヘンリ・ナッシから求婚された。ケンブリッジ大学を卒業し聖職についた彼は，サセックス州のドニントンの牧師補に正式採用され，寄宿学校を運営するためにシャーロットを妻に望んだのである。だがシャーロットはあまりに実務的な彼の申し込みや，自分の理想としていた愛による結婚とは思えなかったことなどから，これを断った。それから半年も経たないうちに，父親の友人の牧師補デイヴィッド・ブライスから唐突なプロポーズを受ける。アングリア物語で描いてきたマイナ・ローリやキャロライン・ヴァーノンなどのヒロインたちの情熱的な恋愛とは異なり，実際のプロポーズは愛とは無縁な打算的なものであり，シャーロットは「12歳の時から予感していたようにオールドミスになる運命」（1839年8月4日付け）を確信する。

結婚による生活の安定を得られなければ，自活する手段を求めなければならない。それはシャーロットだけでなく，ブロンテ姉妹全員にいえることであった。姉たちの学校教師としての失敗を見てきたアンが，姉妹のなかで最初に住み込みの家庭教師になる。勤め先は，地主で治安判事まで務めたイングラム家で，仕事の内容は7歳と5歳のこどもの保育と勉強の両方をみるnursery-governess（育児婦）だった。アンが出発してから一か月後にシャーロットが綿紡績工場主のシジウィック家の家庭教師になる。イングラム家もシジウィック家もウラー先生や彼女の義弟の紹介によるもので，ブロンテ姉妹には多少なじみがあった。金持ちであってもとくに身分が高いわけではなく，教区牧師の娘たちとしては父の教会で見かけることもあったかれらに，召使いの扱いを受けることは予期していないことであった。アンは1839年4月から12月まで勤務するが，シャーロットは5月から7月のわずか2カ月しか続かなかった。

シジウィック家から帰るとシャーロットはいくつかの障害をのり越えて，エレンと初めて海辺への汽車旅を実現する。若い女性ふたりだけの旅の成功は，それまでの限られた行動範囲の拡大と行動の自由を意味していた。ブランウェルしか行ったことのなかったロンドンも，今では汽車で女性ひとりでも行ける場所となったのである。時代はヴィクトリア朝へと変わっていた。1837年に年老いたウィリアム4世が死去し，姪のヴィクトリアが18歳で王位に着いたのである。自分たちより若い女王の出現は，新しい時代の到来を感じさせるものであった。

姉や妹たちの自活の試みが順調には行かなかったように，ブランウェルの肖像画家としての商売も失敗に終わった。この頃から銀盤写真が現れはじめ肖像画が斜陽になりつつあったことも手伝って，お客もないままに1839年5月にはブラッドフォードのアトリエを閉めた。ブランウェルが画家シンプソンにあてた1839年8月24日付けの手紙から，彼には借金があり仕事の失敗に自棄的な気分になっていることがわかる。そんな弟の姿をシャーロットはアングリア物語のHenry Hastingsに投影させている。年がかわってブランウェルは，ブロートン・イン・ファーネスのポスルスウェイト家の個人教授に雇われた。だが半年後の1840年6月には飲酒が原因で解雇される。

54（71）　　1839年1月20日

優しいエレンへ――この3カ月のあいだに熱心なご招待をなんどいただいたかと思うと，笑みを禁じえません[1]。もしそれらをすべて，いえその半分でもお受けしていたなら，バーストールの人たちはわたしがブルックロイドを永住の地と決めたものと思うでしょう。あなたはひとつのことを思い定めると，それを三段論法で囲いこんで断ることができないようにしてしまう独特の方法をもっています。けれどわたしは飛び跳ねて囲いを越えてしまうことにしましょう。エレン，はっきり言いますが，お伺いできません。考えてもみてください。知り合いの人たち全員にきちんといとまご

いをしておきながら，それからひと月もたたないうちに，足繁くお近くまで出かけるなんて変だと思いませんか。でもご親切なお招きには，あなたにもお母さまにも感謝しています。テイラー姉妹とごいっしょにハワースに来てはどうかというわたしの提案に，お返事をいただいていません。それがいちばん良い計画だとわたしはまだ思っています。ブラッドフォードからハダーズフィールドへの馬車の時間をアミーリア・ウォーカーが間違えなかったなら，今ごろはラッセルズ・ホールにいたでしょうに。明日出かけることになります。なんということかしら！この訪問が早く終わってほしいものです。あなたとテイラー姉妹がこちらにいてくれたら。労せずして楽しみは手には入らないものです。

まだ発泡膏をつけなければならないなんて，少し心配しています。そんなことをして身体が弱わらないものでしょうか。焼灼は水泡でただれた跡のためかしら，それとも炎症をふせぐためなのかしら。あなたのばあい，そんな治療法は奇妙に思えます。こちらにいらしたらお医者の処方などやめにして，運動と新鮮な空気が与えてくれるものを試しましょう。あなた用のろば[2]のことなど，ブランウェルに確かめておいてくれるよう頼みました。

エレン，せめて夏至の頃くらいまでわたしを招いてはいけません。お断りするなんて，おばかさんとおっしゃるでしょう。でもかまいません――あなたがハワースにいらしたときに，仲直りのキスをしていただけるものと信じます。

皆がよろしくといっています。とくに伯母さまが。あなたはお怒りでしょうが，わたしはいつものように――（いえ，いつものようにではなく，状況にあわせて）――署名いたします。憂鬱な気持ちで。

C．ブロンテ

1）エレンは1838年10月にようやくブルックロイドに戻り，ふたりは頻繁に行き来したものと思われる。そのためかこの時期の手紙のやりとりは少なくなっている。

2）エレンは健康がすぐれず，彼女の家族はハワース訪問に難色を示していた。シャーロットはエレンが疲れずに荒野を散歩できるよう，ろばを借りることにしたのである。

55（72）　ヘンリ・ナッシ牧師へ

ハワース1839年3月5日

ヘンリさま――お返事をさしあげる前に，よくよく考えるべきであったかもしれません。けれどもお手紙をいただいて読ませていただいたときから，わたしの考えは決まっておりましたので，ぐずぐずと遅らせるのはどうかと思いました[1]。ご存知のように，お家の方々にはなにかとお世話になっております。なかでも妹さんのおひとりとはたいへん親しくさせていただいております。あなたさまもご尊敬申しあげております。それゆえ，お申込みに対して「きっぱりお断りする」とお答えしても，どうかわたしが間違っているなどとお責めにならないでください。この決心をするにあたって，わたしは自分の感情よりも良心の命ずるところに従ったことを誓って申し上げたいと思います。あなたと結婚することに，わたしは少しも抵抗はありません。けれどもわたしのような性格ではあなたを幸せにできないことは，だれの目にも明らかです。わたしはいつも自分の周囲の人たちの性格を観察することにしています。わたしにはあなたの性格はわかっているつもりですし，それればかりでなく，どのような性格の女性があなたの妻にふさわしいかもわかります。個性が強く，情熱的で，独創的であってはいけません。性格が穏やかで，信仰心が篤く，落ちついた明るい女性でなければなりません。それに容姿もあなたの眼を楽しませ，自尊心を満足させられる方が望ましい

といえましょう。あなたはわたしをご存知ないのです。わたしはあなたがお思いになっているような，まじめで落ち着きのある冷静な人間などではありません。時間がたてば，わたしのことをロマンティックで変わった女，いやみで辛辣な女だとお思いになるでしょう。けれどわたしは人を欺くことはできません。華やかな結婚を望み，オールド・ミスのそしりを免れたいばかりに，不幸をもたらすとわかっていながら，立派な方の求婚をお受けするわけにはいかないのです。最後になりましたが，ドニントンの学校についてのお申し出，ほんとうにありがとうございました[2]。気にかけていただいて感謝しております。じつをいいますと現在のところ資金が十分ではありませんので，そうした計画に乗り出すことはできません。そちらでの生活も落ちつき健康も回復されたとのこと，なによりです[3]。神のお慈悲をお祈りしております。良識的で飾り気のない誠実なお便りに心うたれました。お別れの言葉とともに，今後とも親しき友としてのお便りをお待ち申し上げております。

1）ヘンリ・ナッシは3月1日にシャーロットに結婚を申し込んだ。
2）1838年末からチチェスター近くの村の牧師補になったヘンリは，副収入の道として寄宿学校を開くことを考え，シャーロットに協力を依頼した。
3）ヘンリもアンと同じ頃（37年夏）から病気がちで，デューズベリの牧師補をやめざるをえなかった。その後，病気は回復するが，落馬して頭に負傷したことから一時的な言語障害になり，復職したバートン・アグネスの教会からも解雇された。そのため1838年11月29日にサセックス州のチチェスター近くのEarnleyに移り，そこで牧師補として落ち着いた。

56（73）　　ハワース，1839年3月12日

あなたのお便りを手にしたとき，わたしは「やっと来てくれるのね」と思わず口にしていました。でも封を切って，そこに書かれていることにはほんとうに落胆してしまいました。もうブルックロイドへは招いてくださらないでけっこうです。子どものように聞き分けがないと笑われるのはわかっていますが，あなたがハワースに来られない以上，わたしが出かけることはできません。あなたを責めているのではありません。かなうならば，きっと来てくださったことでしょう。周りの方々を非難すべきではないと思いますが，とても悲しいです。

アンはとくに出発を遅らせなければならない事態でも起こらないかぎり，4月8日にはブレイク・ホール[1]に行くことになっています。トス・ブルック夫人からは，いまのところ音沙汰なしです。父は今しばらく家にいることを望んでいますが，わたしはまた仕事に戻りたい気がしてきたところです。でもここで何週間も気ままに過ごした後では，あの惨めな「労役」に戻るのはなかなか骨だとは思いますが。

ヘンリのお手紙についておたずねですが，たしかに一週間ほど前に受け取りました。本当のところ少し驚きましたが，ひとり胸に収めていました。このことについては聞かれないかぎり，蒸し返すつもりはありませんでした。ヘンリはドニントンに落ち着いて身体の調子もずっとよくなり，イースター後に生徒集めにかかる予定だそうです。そうこうするうちにその生徒たちの世話をする妻が必要になってくるので，わたしにその役を引き受けてくれないかという，率直な申込みでした。全体として手紙はおせじのない冷静な文面で，彼らしい良識に富んだものでした。

エレン，このプロポーズに引かれるものがなかったわけではありません。もしヘンリの妻になれば夫の妹とも暮らすことになり，わたしにすればこんな嬉しいことはないのですから。でも2つのことを自分に問いかけたのです。女が結婚する相手にたいして抱くべき深い愛を，わたしはヘンリ

に感じているだろうか。彼を幸せにする資格をわたしは誰よりも備えているだろうか。エレン，これらに対して，わたしの良心は「ノー」と答えたのです。ヘンリのことは尊敬し好意も感じています。気だての優しい親切な方ですから。でもわたしは彼のために死んでもよいと思えるほどの強いものを感じなかったし，感じられるとも思えなかったのです。夫となる男性は，そのように崇拝できる人でなければならないと決めています。今後おそらく2度とこんなチャンスは来ないでしょう。しかたありません。ヘンリはわたしのことをほとんど知らない，どういう人間に求婚したのかもわかっていないのではないでしょうか。実家にいるふだんのわたしの姿をご覧になれば，眼を丸くすることでしょう。ほんとうはロマンティックで激しやすい感情的な女だということがわかるでしょう。夫の前で朝から晩までしとやかにしているなんて，わたしにはできそうもありません。彼がほんとうにわたしのことを思ってくださるのなら，わたしは世界のすべてを失っても彼のために尽くしたいと思うことでしょう[2]。自分の性格を知りながら，ヘンリのようなまじめでおとなしい青年の求婚をお受けすることなど，良心が許しません。彼をだますなんて，わたしにはそんな破廉恥なことはできないのです。わたしは長い手紙を書いて丁重にお断りし，その理由もありのままに記しました。そしてどのような方が彼の妻にふさわしいのかも書き送りました。お便りをお待ちしています。お怒りでないかどうかお知らせください。さようなら，愛しのエレン。

C・ブロンテ

1）原注：マーフィールドのブレイク・ホール。アン・ブロンテは1839年4月から12月まで，Ingham家の家庭教師を務めた。
（訳注）インガム夫人の妹Harriet Cunliffe Lister（シャーロットの手紙や日記にしばしば登場する）がロウ・ヘッドでアンの同級生であったことから，ミス・ウラーの仲介があったと考えられる。

2）ヘンリの意中の女性は，前任地バートン・アグネスでおなじ牧師補だったCharles Henry Lutwidgeの妹Margaret Annであった。1838年夏から彼女に思いを寄せ，1839年2月18日と2月26日に求婚したが，彼女の父親から断られた。シャーロットは自分が2番目の候補者であることを知っていたのかもしれない。

57 (74)　　ハワース，1839年4月15日

愛するエレン———お返事をご希望の週はアンの出発の準備に追われていて，とてもお便りする時間がありませんでした。かわいそうなアン。先週の月曜に出発しましたが，だれも付き添って行きませんでした。ひとりで行かせて欲しいという本人の願いでしたので。独りでやるしかないとなればうまくやれるだろうし，その勇気も湧いてくるだろうと考えたのです。着いてからいちど手紙がきました。とても満足だと書いてありました。インガム夫人[1]もたいへん優しい方だそうです。アンが世話をするのは上のふたりの子供たち[2]で，下の子たちはまだ赤ん坊で，彼女には関係ありません。生徒たちはそろってどうしようもない低能で，ふたりとも字が読めないどころかアルファベットすら怪しいときがあります。最悪なのはその小猿どもがひどく甘やかされていて，アンにはお仕置をする権限が与えられていないことです。子供たちがいたずらをしたときは，母親に知らせるようにとのことですが，そんなことは論外だとアンは書いています。それでは朝から晩まで告げ口していなくてはならないことになりますから。「それで叱ったりおだてたり脅したりしながら，いつも初心を忘れずに精いっぱいやるだけ」というわけです。その気持ちを忘れないよう望むばかりです。分別をわきまえた賢明なアンの手紙には，あなたも驚かされることでしょう。わたしが心配しているのは，ただアンの話術についてだけです。インガム夫人がアンのことを，生まれつき言語障害があるなどと思いやしないか，案じられてなりません。わたしはといえば「いまだに仕事にあぶれた家

政婦のように———勤め先を探して」いるところです。ところでエレン，最近になって気がついたのですが，わたしには掃除の才能があるようです。炉ばたを掃いたり部屋のほこりをはらったり，ベッドを整えることもできます。ですから思うようにいかなかったときは，そちらに方向転換をすることもできましょう。どなたかささやかな仕事でよい給料を下さる方がいれば。料理人はちょっと無理かと思います。料理は苦手です。保母もだめでメイドも，ましてやコンパニオンなどとんでもありません。マントも縫えませんし麦わら帽子も作れない，簡単な仕事の手伝いすらできません。家政婦ぐらいがせいぜいでしょうか。

冗談はさておき，エレン，前回のお便りでお加減がだいぶ良くなったとうかがって，とても喜んでいます。時にはあなたには言えないくらい心配していました。ハワースにいらっしゃれば必ず健康を回復されるものと思います。こんなによい気候になったのですから，寒いというのはもう理由にはなりません。どんなにお腹立ちでもこちらにお出かけいただくまでは，わたしの方もブルックロイドへはおじゃましないという考えに変わりはありません。こうした決心は間違ってはいないと思いますので，それを曲げるつもりはありません。腹立ちまぎれではなく，理性的な判断なのですから。お家の方々がお許しにならないのは，わたしのことをよく思っていらっしゃらないから，などと考えたことはまったくありません。あの頃のあなたの危なっかしい健康状態では，近くにおいておきたいと思うのはもっともなことです。でもすっかり回復した今では，そうした主張はもう通りません。ゴマソールに伺うことについては，まだ招待されていません。けれどたとえ招かれても，とても辛いことなのですが，お断わりしなければならないと心に決めております。テイラー家の皆さんとのお付きあいはほんとうに心楽しいものなのですが。愛するエレン，そろそろ筆をおきます。さようなら，親愛なるエレン。くり返します，お会いしたいです。親愛なるなどという文句は削って下さい。そんな言葉を口にして，いったい何の役にたつでしょう。わたしたちは長い知合いで，たがいに好意をよせあっているのですから，それだけで充分というものです。

1）Mrs Ingham, Mary　インガム家はナッシ家とも結婚による姻戚関係にあり，またミス・ウラーとも知り合いであった。Joshua Inghamは1834年にデューズベリにおいて救貧法(The Poor Law Amendment Act)を強硬可決させ，法案反対の群衆（機械の導入によって職を追われた織工たち）が彼に投石するなど暴動騒ぎ(Dewsbury riot)が起こった。

2）7歳の男児と5歳の女児の育児婦(nursery-governess)で，年俸は25ポンドであった。

58（75）　エミリ・ブロンテあて

ストーンガップ，1839年6月8日

親愛なるラヴィニア[1]———あれこれ見つけだし取りそろえて送ってくださって，ほんとうにありがとう。箱も中身も期待どおりでした。ただ便箋もお願いすればよかったと悔やんでいます。残りがたった2枚しかないのです。いま仕立てている洋服などを送るさいに，いっしょに入れてくれればたいへん嬉しいです。

新しい職場になれようと頑張っています。すでにお知らせしたように，あたりの田園風景といい，お屋敷のたたずまいや庭園といい，じつに申し分ありません[2]。ところが何ということでしょう，心慰む森や曲がりくねった白い小道も，蒼々とした芝地やきらきらと陽が光る青い空も，それらを愛でるささやかな時さえ奪われているのです。子供たちはたえずまとわりつきます。こんなに騒がしくひねくれた手に負えない子供たちは初めてです[3]。彼らをしつけるなどまったく論外であることは，

すぐにわかりました。したい放題にさせておくだけです。母親に苦情をいってみても，いやな顔をされるだけですから。子供たちの肩をもち，言い訳にもならない言い訳を聞かされるのがおちです。一度やってみましたが効果てきめんでしたので，もう2度と試みる気はありません。前にも書きましたが，シジウィック夫人[4]はわたしのことをわかっていらっしゃらないのです。今では，わかろうという気がないのだとわかってきました。わたしのことで関心があるのは，ただいかにしたらわたしをむだなく働かせることができるか，ということだけなのです。その目的を果たそうと，山のような縫物，縁飾りをつける何ヤードもの亜麻布，ナイトキャップ用のモスリン，とりわけ洋服をきせなければならない人形たちを押しつけるのです。夫人はわたしをまったく気に入らないのではないかと思います。入れかわり立ちかわりする見知らぬ人たちのなかで，まったく新しい場面を前にわたしはただおどおどとうろたえるばかりです。かつては高貴な方々でにぎわう社交場をのぞいてみたいとも思いましたが，今ではその気も失せました。それを眺め聞くのも，わびしさが募るばかりです。これまで考えていたのとは違ってわかってきたことは，家庭教師というのは自分をもたないのだ，理性をもつひとりの生きた人間とはみなしてもらえないのだということです。家庭教師は退屈な家事万端についた付属品のようにしか見られていないのです。子供たちに勉強を教え，かれらのために身を粉にし，かれらのご機嫌をとっているかぎりはお覚えめでたいのですが，ほんの一瞬でも自分のための時間をかすめ取ろうものなら，困った人ということになるのです。ところが夫人は周りの評判がよく，人の気を逸さないなかなかの社交家ときています。じつによく舌が回りますが，わたしにはあまり要領を得ているようには思えません。たぶんもう少し時間がたてばもっと好感をもてるようになるのでしょうが，今のところ好きにはなれません。わたしの見るところご主人の方がずっとましです。寡黙な方で，態度では示しませんが気持ちの優しい方です。めったに話しかけては下さいませんが，ことばを交わした後はいつもしばらく幸せな落ち着いた気持ちになります。子供たちの汚い鼻を拭くようにとか，靴ひもを結ぶようにとか，椅子にきちんと座らせるようになどと命じたりなさいません。こちらでいちばん楽しかった午後といえば———じつは楽しい出来事は後にも先にもこれっきりですが———シジウィックさんが子供たちと散歩にお出かけになったとき，わたしにも少し遅れてついてくるようにと言いつけられたことです。立派なニューファウンドランド犬をお供に悠然と野原を歩かれる姿は，率直で裕福で保守的なジェントルマンの典型に見えました。出会った人たちとは気さくに挨拶をかわし，子供たちを甘やかしうるさくまとわりついても叱りませんが，他人に対して礼を失することだけはお許しになりません。

カーター家の人たち[5]に注目しています。家にいたころには気にもかけなかったのに，こちらでは友人です。カーターさんは昨日マーフィールドでアンを見かけたそうです。とても元気そうにしていたと教えてくれました。かわいそうなアン，さぞかし家に帰りたいでしょう。シジウィック夫人がわたしを今後も側に置きたがっているとコリンズさんが言ったそうですが，そんなはずはないと思います。それになんらかの待遇改善がなされないかぎり，わたしは留まるつもりはありません。たとえばこの針仕事の負担は免除してもらわなければ。何から何までひどすぎます。これまでこんなに時間を奪われたことはありません。来週からハロゲートに近いスウォークリッフにあるグリーンウッドさんの別荘に出かけ，そこに3週間からひと月近く滞在することになるでしょう。ミス・ホビー[6]が戻られるのが，その後ならいいのだけれど。この手紙はお父さまや伯母さまには見せないでちょうだい。ブランウェルなら構いません。どこに行っても文句ばかり言っているといわれたくないのです。話して気が晴れました。じっさい考えられないような侮辱にも耐えなければならないのです。でも事態は好転するかもしれません。それにしてもシジウィック夫人は不可能なこと——

―子供たちを愛し，かれらのために身も心も捧げること―――をわたしに期待するのです。健康状態は申し分ありません。ひどく眠くてもう書いていられません。明りを消さなくては。皆によろしく。さようなら。

次のお便りはハロゲート近隣スウォークリッフのＪ・グリーンウッドさん宛てとしてください。

1）Lavinia　ウェリギリウスの『アエネーイス』に登場する王妃の名。
2）ストーンガップの屋敷は18世紀末にスキプトンで綿紡績工場を経営して財を成したシジウィック氏の父親が建てたもので，Lothersdaleの渓谷を臨み背後には丘陵が連なる見事な景観のなかにあった。
3）６歳半の女児と４歳の男児がシャーロットの担当だった。報酬は不明。
4）Mrs Sidgwick　旧姓Sarah Hannah Greenwood。ハワース近隣のOxenhopeに住む製造業者John Greenwoodの娘。シャーロットはグリーンウッド家の親戚たちとは顔見知りで，サラの義兄はキースリの牧師で父の友人のひとりであった。
5）Edward Nicholl Carterはマーフィールドで1827年から38年まで牧師補を務めていたが，その後ストーンガップのあるLothersdaleの牧師補に赴任していた。Anne Carterは彼の妹。1839年末に急死する。なおエドワードはミス・ウラーの義弟にあたる。手紙49(64)の注３を参照。
6）Miss Hoby　シジウィック家の家庭教師。シャーロットは彼女の代わりに一時的に雇われた。ミス・ホビーが退職する可能性もあったのだが，結果的にはシャーロットがシジウィック夫人とうまくゆかず２カ月で辞めることになった。

59（76）　　〔スウォークリッフ，1839年６月30日〕

親愛なるエレン―――鉛筆で書いています。インクは居間に取りにいけばあるのですが，今はそこには行きたくないのです。ようやく昨日になってお便りが届きました。というのも今はストーンガップではなく，スウォークリッフにあるシジウィック夫人のお父さんのグリーンウッドさんの夏の別荘に滞在しているのです。ハロゲートやリポンがすぐそばで，ここはこの辺りでもとりわけ風光明眉な所です。肥沃な田園地帯が広がっています。もっとずっと早くにお便りし，今度のまったく新しい環境について詳しくお知らせするべきであったかもしれません。毎日あなたからのお便りを待ちわびて，来ないのをあれこれ考えてなどいないで。あなたがお便りをくださる番であったのをお忘れでしょうか。わたしのことでご心配をかけてはいけないと思いますが，あれこれ誇張した話を耳にしておられるのではないでしょうか。ここにあなたがいらっしゃれば，何もかも話したい誘惑にかられたかもしれません。自分のことしか目に入らず，はじめての家庭教師先での試練や苦労について長々と述べたてたことでしょう。実情はただご想像にお任せするとしか言いようがありません。わたしのような引込み思案な人間が，大家族―――孔雀のように尊大でユダヤ人のように大金持ち―――のなかに放り込まれた惨めさを。それも家中にお客が―――どこを見ても他人ばかりで知った顔ひとつないのです―――溢れかえっているといった状況の中で，甘やかされわがまま放題の子供たちを預けられ，彼らを勉強させるだけでなくあやしてやらなければならなかったのです。わたしはたちまち持てる力を使いはたし，ときおり気分が沈み，そんな顔も見せたでしょう。驚いたことにそんなわたしを，シジウィック夫人は信じられない態度と言葉で厳しくたしなめたのです。わたしは馬鹿みたいに泣くばかりでした。どうにも堪えきれなかったのです。はじめはすっかり気落ちしてしまいました。自分ではできるかぎり頑張った―――夫人のご機嫌を損ねまいと気をつかい―――つもりでした。なのに人見知りですこし陰気な顔をしていたからといって，それだけであんな扱いをされるなんて，あんまりです。はじめは何もかも放りだして逃げ帰ってしまおうかと思

いましたが，しばらくして自分のもてる力をふりしぼって嵐に耐えようと思い直したのです。これまでひとりの友も得ることなく去ったことはなかったのだから，と自分にいいきかせました。逆境はよい試練です———貧しき者は働くために，召使は耐えるために生まれてきたのだと教えられました。辛抱するつもりです———自分の感情を抑え来るものを受け入れて，苦難は何週間も続きはしないと考えました。そしてそれが自分のためにもなるのだと信じることにしたのです。柳と樫の木の寓話[1]が思い出されます。静かに身を屈めているうちに，嵐は頭のうえを過ぎていくことでしょう。世間の人たちはシジウィック夫人のことを感じのよい人といいます。たしかに一般的にはそうなのでしょう。いかにも健康そうで潑剌としているので，いっしょにいると楽しくなるのです。でもエレン，だからといってそれで細やかな心遣いや優しさや繊細な神経に欠けていることの埋め合せになるものでしょうか。

夫人も今では初めの頃にくらべて多少は控え目になり，子供たちもいくらか扱いやすくなりました。けれどもわたしの性格はご存じないし，知ろうとする気もないのです。こちらに来てから5分と———小言をいうときは別ですが———お話ししたことがありません。この手紙のことはだれにも言わないでください———あなた以外のひとから憐れみを受けたくないです———たとえマーサ・テイラーでも話さないでちょうだい。これがあなたとおしゃべりしているのなら，いくらでもお話がはずむのに。けれど因われの期間も間もなく終り，じきに家に帰れることでしょう。そうすればあなたが会いにいらっしゃることができます。楽しみです。それではさようなら，愛するエレン。

どうかすぐにお返事をかいて，近況をお知らせください。宛先はハロゲート近隣スウォークリッフのJ・グリーンウッドさんとしていただきますように。たぶんお便りが着くより早く帰宅していると思いますが。間もなくスウォークリッフを引き上げることになりますが，ここから帰ったら長居をするつもりはありません。

1）柳も樫も辛抱強い例えとして，それぞれ次のような諺がある。
(柳) Willows are weak, yet they bind other wood.
(樫) An oak is not felled at one stroke.

60 (77)　エミリ・ブロンテへ　1839年7月

お手紙，言葉にならないくらい嬉しかったわ。家からの便りはほんとうに嬉しいもので，寝るときまでとっておいて，静かに心ゆくまでじっくりと味わうのです。できるだけお便りください。家へ帰りたいです。粉ひき場で仕事をしたいです。心の自由を味わいたいです。この精神的な重圧から逃れたいです。でも休暇は目の前です。頑張りましょう！

61 (78)　＊＊39年7月26日

愛するエレン———あなたのご提案にはほとんど'気もふれんばかり'になりました。このレディーらしい表現が理解できなければ，こんどお会いしたときにその意味をたずねてみてください。じつはあなたとご一緒の旅ならばどこでも———クリーソープスであれカナダであれ，わたしたちだけ———じゃまな馬鹿者なしで———わたしはほんとうに嬉しいです。ぜひ行きたいです。でも1週間以上は家を開けられませんし，それではあなたの目的には叶わないでしょう[1]。そうするとすっかりあきらめなければならないのかしら。そんなことはできそうにありません。今までこんな楽しい機会はありませんでしたし，ぜひともお会いして，話をして，いっしょにいたいのです。お出かけ

はいつにしたいですか。リーズで落ち合えますか。ハワースからバーストールまでギグを頼むのは，わたしには大きな出費になりそうです。それにたまたま持ち合わせがあまりないのです。エレン，お金もちはわたしたちには禁じられているたくさんの楽しみを思いのままに楽しんでいるように思えます。でも不平をいうのはやめましょう。馬車でキースリーからブラッドフォードを経てリーズまで行きます。リーズ＝セルビー鉄道[2]でいらっしゃると思いますから，クリーソープスへの途中の馬車の停車する宿でわたしを出迎えてくだされば，それがわたしにはもっとも都合がよいのですが。

ストーンガップは1週間前にやめました。あの家から出られることがあんなに嬉しかったことはありません。でも今は文句をならべてあなたを煩わせることはやめましょう。すぐにお手紙であなたの計画についてもっと詳しく知らせてください。出発はいつなのかなど。ごいっしょできるかどうか，お返事を送りたいと思います。行かなければ。きっと行きます。ぜったい行ってみせます。断固として反対は抑えつけて見せます。さようなら。

C．ブロンテ

追伸　1週間いじょう滞在することが不可能とわかったら，残りの2週間あなたに付き添ってくれる方を他にどなたか見つけられますか。この手紙を書いたあとで，伯母と父が2週間リヴァプールに行くことにしていて，わたしたちをみんな連れていくことにしているのを知りました。わたしがクリーソープスの計画をあきらめるのが当然だと言われています。いやいや応じました。でも伯母さまが言うには，リヴァプールであなたがわたしたちに合流できるのではということです。どう思いますか。わたしたちは2週間も3週間も行っていることはないでしょう。それまでに父の助手の方[3]が代わりをできる準備が整ってはいないでしょうから。

1）健康状態がすぐれなかったエレンは海辺で3週間ほど保養をすることを家族から勧められ，ストーンガップから帰ったシャーロットを誘ったのである。

2）1830年9月にリヴァプール・マンチェスター鉄道が開業していらい，鉄道はイギリス全土に急速に普及した。とくに産業革命が進展していた北部地方での鉄道建設はすさまじい勢いで，鉄道株の投機で成功したGeorge Hudson(1800-1871)は，ヨーク・ノースミッドランド鉄道，マンチェスター・リーズ鉄道（後にブランウェルが雇われる），ハル・セルビー鉄道，その他の弱小会社を併合して，1844年にはミッドランド鉄道にまとめあげイギリス全土の路線の半分を支配した。セルビーはハルとリーズの中間地点にある。

3）William Weightmanのこと。5月には採用が決まっていたが，赴任は8月になった。牧師館では彼は人気者で，シャーロットの手紙にもしばしば登場する。アンが思いを寄せていたが，1842年9月6日にコレラで急死した。1842年11月10日付けのシャーロットの手紙を参照。

62（79）　　———39年8月4日

最愛のエレンへ———お返事が遅くなりましたが，何かはっきりしたお答えができるまで待ったほうが良いのではと思ううちに，とうとう今日になってしまいました。

リヴァプール旅行の件は今のところ話ばかりで，いわば蜃気楼といったところです。ここだけの話ですが，はたしてこの計画が具体的なものになるか，ひどく疑わしいように思えます。伯母が———お年寄りにありがちなように———話ばかりで，いざ実行する段になると二の足を踏むのです。こんなようすですから，他の人たちとは関係なくわたしたちだけでどこかに出かけるという当初の案を進めた方がよいように思います。1週間せいぜい2週間で，それ以上は無理ですが，ごいっしょする許可を得ました。どこに行ってみたいかしら。メアリ・テイラーの話から，バーリントン辺りが適当かと思うのですが。出発はいつにしましょうか———あなたのご都合に合わせます。「海」

を見られる———浜辺を歩き，日の出に，日の入りに，月光の下で———真昼の凪いだ海を，あるいは嵐に逆巻く海を眺める———と思うと胸がいっぱいになります。なにもかも満足がいくことでしょう。そんな時に自分とはなんの共通点も持ちあわせない人々といっしょにいたくないのです。彼らは気うるさく退屈なだけです。エレン，わたしは自分の好きな人，自分を理解してくれている人，つまりあなたとふたりきりになりたいのです。ひとつお知らせしたい滑稽な事件がありました。先日，むかしお父さまの牧師補をなさっていたホジスンさん———今では教区牧師になられました———が，ご自分の牧師補の方をつれてご訪問になりました。その方はダブリン大学を出たばかりのプライスさんとおっしゃる若いアイルランド人で[1]，わたしたちは初対面でしたのに，いかにもアイルランドの方らしくたちまち打ち解けたようすでした。話ぶりから伺われる性格は機転がきき，明るく情熱的で才気かん発なのですが，イギリス人的な品位や慎重さにはいささか欠けているように思いました。エレン，ご存知のように家にいるわたしはおしゃべりで，はにかむことなどまったくないのです。外ではわたしをあんなに苦しめる病的なほどの羞恥心にうちひしがれ悩まされることは決してありません。このアイルランドの青年とも話がはずみ，彼の冗談にはおなかを抱えました。性格上の欠点も独特の陽気さに補われるように思いました。実をいうと，わたしはあまり長くは同席しなかったのです。というのも会話のなかに見え透いたアイルランド的なお世辞が混じりはじめましたので。とにかくお客さまたちはお帰りになり，その後とくに思い出すこともなく過ぎていました。それから数日後，見なれない筆跡で———わたしにお便りを下さるのは，あなたかメアリ・テイラーの他にはいません———宛先を記した手紙が届きました。封を開いてみると，中身は恋文だったのです。あの思慮深いアイルランド青年が，熱烈な言葉で結婚を申込んできたのです！一目惚れとは噂に聞いていましたが，こんなに早いのも珍しいでしょう。どうお返事したかは，ご想像に任せましょう。まさか誤解なさることはないでしょうから。今度お会いしたら，その手紙をお目にかけましょう。笑いすぎませんように。これがマーサ・テイラーならともかく，このわたしの身に起こるなんて！わたしはよくよくオールド・ミスになる運命なのね。もうこれっきりチャンスはないでしょうから。12歳の時からその運命を予感していたと言っても，気にしないでね。お断りするまでもないとは思いますが，この珍事件はふたりだけの話ですよ。お便りお待ちしています。

C・ブロンテ

肝心の用件を。キースリーからブラッドフォード，そしてリーズまで馬車で行くとして，その後どのようにして落ち合うかをまだ決めていませんでした。リーズには朝10時か11頃には着くと思います———ご都合はいかがでしょうか。馬車が止まる宿屋で待ち合わせてはと思いますが。もしご都合が悪ければ，なにか別の手段を考えなければなりません。あるいは前日にブルックロイドに伺った方がよいかもしれません。ブラッドフォードからの昼間の馬車でお宅の近くを通る便があるかしら。最後に，わたしは限られた短い時間しか滞在できませんが，それであなたの静養の目的にかなうでしょうか，まだ伺っていませんでした。もしそうなら，すぐにもこの計画はとりやめます。はやくお便りください。

荷物はどれくらいにしますか，たくさんお持ちになる，それとも身軽になさいますか。

1）原注：正しい名前はPriceではなくBryceである。
（訳注）ブライスはこれから半年後に病死した。1840年8月9日付けの手紙を参照。

63（80）　　1839年8月9日

愛するエレン———急ぎ返事を書きます。ご計画をひっくり返すようでたいへん申し訳ないのですが，明日はとても行けません。たとえ絞首刑にされても，明日の午前10時に荷物をもってリーズにいくことなどできません。もういちどお便りください。もう少し準備する時間をみて日にちを設定してください。ご存知のようにハワースは辺鄙なところです。動きだすには一月くらい前にいってくださらなくては。ご親切にも迎えを頼んでみるとのことですが———でもエレン，それはいけません。わたしが平気でそんなご好意を受けられるとお思いですか。いちばん良いのは出発の前日にわたしがブルックロイドまで出かけることです。なんとかします。それではまた。愛するエレン。郵便が出ようとしていますので。金曜・朝　　C．B

64（81）　　1839年8月14日

楽しいはずの旅のために荷物もつめ，すべて準備が整いましたが，むだなことでした。というのは今週も，そして次週も足がないのです。ハワースで雇えるたった1台のギグがハロゲイトに行っていて戻って来ないのです。どれくらいのあいだか見当もつきません。馬車で行ってバーストールまで歩くのは，わたしは大丈夫だというのに，父は絶対反対です。伯母も天気が悪かったらとか，道がでこぼこだとか，なんやかやと反対します。そんなわけで動きがとれません。さらにまずいことに，あなたもおなじなのですね。先日のお手紙を2，3回読み返してみたら（ところで，この手紙があんまり達筆なものですから，いちどさっと目を通しただけでは2語つづけて判る言葉がなかったわよ），この旅行を木曜日まで延ばしたら遅くなりすぎるということのようですね。ほんとうにご迷惑をかけてしまって申し訳ありません。でも今は金曜日だとか土曜日だとかいう必要はないと思います。わたしが行けるというチャンスはほとんどないでしょうから[1]。家の年寄りたちはこれまでもあまり気持ちよく賛成してくれていたわけではありませんが，こうして障害が次々と出てくると，反対はいっそうあからさまになってきました。じつのところお父さまはわたしを思いどおりにさせてあげたいと思っていらっしゃるのですが，その優しさに甘えていいものか悩みます。そういうわけで，伯母さまの不平には負けませんが，お父さまの優しさにはかないません。父は口では言いませんが，わたしに家にいてほしいのです。たぶん伯母さまも良かれと思って言われるのでしょうが，わたしたちのあいだですべてが決まった後になってから，絶対反対などというものですから腹が立ちます。もうわたしのことなど考えないで，数に入れないでください。たぶん最初から，こんな楽しみの可能性に目を閉じるだけの分別をもって，そんな希望は自分に禁じるべきだったのです。あなたをがっかりさせて，思うさまわたしを責めてください。そんなつもりではなかったのです。もうひとつだけ言わせてください。もし海辺へ直行しないのなら，ハワースに寄れるかしら。わたしだけでなく父も伯母もそう望んでいます。エレン，ぜひ来てください。こちらに来られれば，バーストールまでいっしょに帰り2，3日いられます。そうすればあなたのお帰りにも費用はかからないでしょう。これがうまくいけば，海辺へ行くより安上がりでもありますし。テイラーさんのご容態はいかがですか。良くなられましたか。さようなら。

C．ブロンテ

1）この後エレンは兄の馬車を借りてシャーロットをハワースまで自分で迎えに行き，イーストンへの旅行を実現した。

65 (82)　ブラッドフォードの画家J．H．トンプソン[1]あて

ブラッドフォード，ハワース1839年8月24日

拝啓———月曜日か火曜日にビングレーでお会いして話を決めようと思っていたのですが，昨夜，クレイヴン君に出くわし，あなたが早急に返事をほしいと言っておられると聞きました。たぶん用件はこのことだと思い，同封のものを転送してもらうことにしました。

ブラッドフォードではいぜんあなたの人気が高いことを聞いて喜んでいます。そしてまたあなたの方もブラッドフォードを気に入って，そこに落ち着こうというのは嬉しいかぎりです。値上げされますか。それとも今までとおなじ所でおなじ値段でされるのでしょうか。

あなたとアグレンのあいだに何事もなかったらよいのですが。あの小男はあれほど世話になっておきながら，あなたになにか卑劣なことをいってきましたか。わたしの知るかぎりでは，ジョージ亭に宿を取ってやったではありませんか。

ブラッドフォードのお住まいの方にロビンソン夫人を招待するおつもりとのこと，これこそほんとうにご親切というものです。リーズまでご一緒できればよかったのですが，あの時はリヴァプールにおりまして，予定より長い滞在になり，父や伯母には内緒の借金の支払いやら何やらですっかりかんになってしまい，夫人や気の毒なご主人に世話になったお礼にわずかばかりのお金とこの手紙を送ろうと思っていたのに，それもかないませんでした。しかしながら近くリーズに行く予定ですから，そのおりには世間のあまりに多くの人々が傷つけたあの人間に対していくばくかの手助けをしてやりたいと思います。じっさいお便りから読み取れたことにはびっくりしました。もっともこの世界は腐り果てているのですから，驚くまでもなかったかもしれませんが。ロビンソンさんの弟のことですが，ぼくはあのぼくねんじんにはまったく好意をもっていません。

カービー夫人[2]の名前はぼくには目障りです。あの女はいったいどんなつもりなのでしょう。彼女の肖像画の仕上げをするために，どうしてぼくが背中に紙入れをくくりつけてブラッドフォードくんだりまでよたよた出かけなければならないのでしょう。彼女が要求している仕上げの方法なんて，ぼくは聞いたことがありません。あなたのご親切にこれ以上甘える勇気はありませんが，彼女を黙らせるためなら，この手紙に入れた金額あるいはその倍であっても払います。文章がペン先からなめらかに出てきません。ひとの描いたへたくそな絵の仕上げをするなんて，面白くもないし何の得にもなりません。でも自分の言ったことばは守るつもりです。

残念ながらビングレーでお会いすることはできませんが，あしからず。

おふたりのご多幸をお祈りいたしております。　　P．B．ブロンテ

1）John Hunter Thompson　ウィリアム・ロビンソンのスタジオでブランウェルとともに絵を学んでいた。すでにデッサン画家として成功しており，彼の紹介でブランウェルはブラッドフォードの芸術家と知り合うようになった。

2）Mrs Kirby　ブラッドフォードの下宿の主人Isaacの妻。ブランウェルは下宿代の支払いの一部として，夫妻とその姪の肖像画を描いたのだが，1839年5月には下宿を引き上げてしまった。カービー夫人は絵が未完成であると不満をのべ，ブランウェルの友人のトンプソンに仕上げを依頼していた。なおブランウェルはトンプソンに借金をしており，冒頭の同封のものはその返済のための金をさしていると思われる。

66（83）　　ハワース，1839年10月24日

愛するエレン――今ごろまでには，わたしが家に帰り着かず途中で消えてしまったものと思いこんでおられることでしょう。けれどデューズベリの馬車の方が親切にしてくださって，無事に帰宅いたしました。この方と知り合わなかった，どうしたらよいかわからなかったでしょう。キースリー行きの馬車が止まる宿屋までの道を教え，荷物を運んで席をとって，荷物が積み込まれるのを確認し，上の席に乗るのに手を貸してくれたのです。ほんとうに助かりました。

先日，お兄さんのヘンリから長い手紙をいただきました。お相手の方のことを伝えてこられましたが，その方がお手紙に書かれているとおりだとすれば，これまでの彼の行動はまったく正しいと思います。けれども恋は盲目といいます。ですからわたしにはわかりません。まだお返事は差し上げていませんが，近く書くつもりです。

エレン，もう海のことなど忘れてしまいましたか。もうかすかな記憶しかありませんか。それともまだダークブルーやみどりの色合い，白い泡の色が目に残っていますか。風が強いときには荒れ騒ぎ，穏やかなときには静かに押し返していた波の音がまだ聞こえますか。お身体のぐあいはいかがですか。転地の効果はありましたか。わたしはこのうえなく健康で，とても太りました。

イーストンのことをそっちゅう思い出しています。ハドソンさんと優しい奥さまのこと，そしてハーレクイン・ウッドやボイトンへの楽しい散歩のこと，楽しかった夕べ，小さなハンチョンとはしゃぎ回ったことなどを思いだします。わたしたちが長生きしたら，このときのことはいつまでも楽しい思い出になるでしょう。ハドソン夫人へのお便りのなかで，わたしの眼鏡のことをいってくれたかしら。眼鏡がなくてほんとうに弱っています。それがなくては読むことも書くことも，絵を描くこともままならないのです。マダム・ブースがきちんと渡してくれるとよいのですが。

いつまた会えるでしょうか。こちらへ来られる日程ははっきり決まりましたか。

短いお便りでごめんなさい。じつをいうと一日中絵を描いていたものですから，目が疲れて字を書くのが負担なのです。お母さまとお姉さまとサラによろしく。

C．ブロンテ

67（84）　ヘンリ・ナッシ牧師へ

ハワース，1839年10月28日

拝啓――エレンから連絡があればブルックロイドの近況をお知らせできるかと思って待ってみましたが，手紙が参りませんので，これいじょう遅らせては怠け者と思われそうな気がして取りあえずしたためました。ご賢察のとおりあなたのことについて多少耳にしておりましたので，お話し下さって嬉しく存じます。お心を寄せられている方が立派な申し分のない女性となればなおさらのことです。でもお友だちの多くはこの話を進めることをあまり賢明とは思れわないのではないでしょうか。なぜなら財産があることは若い女性の利点には入らないからです。勇気があって芯が強く気だてが良ければ，たとえ万能とされる財産などなくても十分に補われるものとお考えで，富をお求めにならないからこそ，わたしはあなたを尊敬しているのです。財産をもつ妻は夫のところに富だけではなく，尊大さと強い権利意識も持ってくることでしょう。それらは結婚生活に幸福をもたらすものとは期待できません。大いにありうることですが，女性の性質や愛情からすれば服従することが義務であるような場合にも，支配したがることでしょう――そうなればあまり心安まるものとはならないのではないでしょうか。

反対に財産をもたない人たちの結婚を考えてみましょう。欠乏を補うために勇気をもって勤勉に

働くことになります———人に頼ることを嫌い，貧しさに耐え，生活のために額に汗することでしょう。これらの美徳をもてば，たとえ因襲の厳しいおきてから1，2歩はずれたところから出発したにしても，心を合わせる者たちの上には，神の御恵みによってささやかな成功と幸福を手にする権利が与えられるものと思います。正直に骨折って得られた貴きパンは，労せずして与えられたパンよりも美味なことでしょう。たがいに愛しあう平穏な家庭は歳月のなかで錆つき，あるいは使い果たされてしまう財産よりも，遙かに望ましいといえましょう。

エレンとの先頃の旅行は，そうしたことが滅多にないだけに，とても楽しかったです。海の印象については書かないことにします。例によって熱狂の罪に陥るでしょうから。とはいえ海の輝き，移りゆくさま，潮の満干，絶え間ない波の音はわたしをとらえ，疲れも忘れてただ見つめ続けたとだけ申し上げておきましょう。イーストンはほんとうに快適でした。ハドソンご夫妻のご親切は忘れません。滞在中にバートン・アグネスの村にも出かけ，そこで以前あなたの教区民であったというブラウン夫人やダールトン夫人をおたずねしました[1]。旅のもようはエレンから詳しくお聞きになったことでしょうから，ここでくり返すのもご退屈かと存じます。転地と運動が効いたのか，エレンもだいぶ具合が良さそうです。わたしの方は友人たちが賛成してくれるような務め先が見つからないので，まだ家におります。けれど無為の日々がしだいに耐え難くなって参りました。休養も十分で健康もすっかり回復し，もはや怠けている言い訳も尽きて，何かしなければと焦っています。ご多幸をお祈りいたします。ご結婚の運びとなりましたなら，それが最善の意味であなたにとって喜ばしく幸せなものとなりますよう心から願っております。あなたの友より。

C・ブロンテ

追伸　マーシーお姉さまによろしくお伝えください。お身の回りの世話をしていただいているのでしょう。

1）原注：バートン・アグネスはBridlingtonの近隣の美しい村。
（訳注）：55(72)注3を参照。なおブリドリントンはイギリス北東部の海岸の町で，リーズから100kmほど離れている。

68 (85)　　1839年12月21日

愛するエレン———例によって身内の方々の問題や不幸に巻き込まれているようですね。「風はきまって毛を刈り取られた羊にむかって吹きつける」[1]ということのようですが，それにしてもあなたには耐えられないほどの苦しみが，お手紙に書かれているよりもっとたくさんの苦しみがあるのではないかと心配です。刺や茨のあいだに続いているあなたの運命が，その痛みに耐えられる心の落ち着きと従順な気質とを与えてもいるわけですが。

最悪の場面はもう終わったと信じます———お兄さまたちはこれまで勝ち目のない仕事を続けてこられ，悪と戦ってきました。彼らの最大の努力をもってしても，悪の接近はほんの一瞬しか遅らせることはできなかったのです。しかし彼らがあらんかぎりの力を尽くしても，結局は防ぐことはできなかったでしょう。長い戦いによってエネルギーを使い果たしていなかったら，もういちど最後の力をふり絞って試みるならば，これまでにない成功がおさめられるかもしれません。

このひと月のあいだ，こちらは大忙しでした。というのもお手伝いは使い走りの娘しかいないものですから。かわいそうなタビーは足に水がたまってひどいびっこになってしまい，とうとう辞めなければならなくなったのです。今は妹といっしょに自分の小さな家に住んでいます。1，2年前

にお金をためて買ったのです。とても快適に暮らしていて，なにも困ってはいません。近くですから，よく会いに行きます。ところでエミリとわたしはお察しのとおり忙しくしています。わたしがアイロンかけや部屋の掃除をし，エミリがパンを焼いたり台所をやっています。わたしたちはとても変わっているので，新顔が入ってくるより，こうしてやりくりする方がいいのです。それにタビーが戻って来れないとは思っていませんので，不在中に代わりの人を入れるつもりはありません。初めてアイロンをかけようとして伯母さまの洋服を焦がしてしまい，大目玉を食いました。でも今はもっと上手にできます。人間の感情とは妙なものです。わたしは家にいてストーブの墨をはがしたり，ベッドを整えたり床を掃いたりしている方が，他のどこでレディとして暮らしているより，はるかに幸せです。

ところでユダヤ人たちへの寄付金をやめなければなりません。続けるお金がありませんので。もっと前にお知らせしておくべきだったのに，寄付金をすることになっていたのもすっかり忘れていたのです。できればまた仕事につくつもりです。家庭教師と考えるだけでぞっとしますが。でもやらなければ。ですから家庭教師という商品を必要としている家庭があれば，ぜひ連絡をいただきたいです。

愛するエレン，さようなら。楽しいクリスマスを。そして新年が旧年にもまして楽しい年となりますように。

C．ブロンテ

1）原文は‘the wind is always tempered to the shorn lamb’。もとはフランスの諺からだが，Laurence Sterne (1713-1768) が*A Sentimental Journey*中の‘Maraia’で，次のように紹介したのがはじまり。‘God tempers the wind, said Maria, to the shorn lamb’.

69（86）　　［1839年12月28日］

愛するエレン――とり急ぎお返事します。お申し出の日，つまり金曜日に喜んでお迎えします。こちらにいらっしゃるあいだ，できるだけお手伝いできるよう頑張ります。この近所のありさまや社交場なんてまったくないことも，わたしたちの質素で単調な暮らしぶりもすっかりご存知ですから，あなたが退屈で変わりばえのしないことにがっかりしやしないかと，前ほど心配はしていません。

けれど単調な毎日をいっそう変化のないものにしているものがひとつあります。わたしたちを元気づけてくれていたブランウェルが，アルバーストン近くの個人教授の仕事[1]につくために，数日のうちに出発する予定です。彼が気に入って落ち着くかどうかは，まだ見てみなければわかりません。今のところ彼は希望をもって決心も固いようです。

彼の気まぐれな性格と，活発な行動が好きな彼を知るわたしとしては，あまり楽観的ではありません。彼の出発の準備に追われています。シャツを縫ったり衿をかがったりでおおわらわです。金曜になるのをじっと待っています。日程を変更しないで下さい。さようなら，愛するエレン。

C．ブロンテ

今度はあなたが悪筆についてお叱りになる番ですね。

追伸

あなたのために作っているバッグは4カ月前のままです。いらっしゃるときには仕上がっているようにしたいと思います。

1）ブランウェルはUlverstonのBroughton-in-FurnessにあるPostlethwaite家の家庭教師になることが決まっていた。だが1840年6月には飲酒が原因で解雇された。

(1995年8月31日受理)